

330.4
N86

美しき
日本経済

西谷彌兵衛著

新興亞社版



0018305000

0018305-000

330.4-N86ウ

美しき日本経済

西谷彌兵衛・著

新興亞社

昭和17

ADA

2

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月2
付けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

638



330,4
N86

美紅日本經濟

西谷彌兵衛著



東京新亞興社發行



945
142

序……美しき日本經濟

盟邦の碩學カール・ハウスホーファは、日本の目覺しい發展に瞠目しつつ、
の名著「太平洋地政學」に次のごとく述べた。(太平洋協會譯、岩波書店版)に
よる。

「抑も、新しき日本は、世界政策と世界經濟とに取つて何物を意味するか？
東亞の先進國、最大なる大陸の現在の最強なる生活形態たる此の國は、弦を
離れた矢の如く、自給自足的島嶼孤線の埒、統一的人種國家の埒を脱して、
一躍、人類の運命を左右する世界的勢力の仲間に加はつた。それは島嶼孤線
の脊柱より大陸へ向つて、日本海の周邊に、海洋を包括する一箇の大領圖を
圍む國家體軀を築いた。……正に、自然の、論理的に強要する基礎の上に立

文

序



美しき日本經濟



ち、雄大なる地理學的妥當性を有する一箇の國家發展である！」

しかもこの「地理學的妥當性を有する」日本の發展は、さらに強固な統一的
意思によつて貫かれてゐたのであつた。即ち――

「此の體軀を、その上に尙ほ、一個の統一的民族精神が満たして居る。すな
はち、全版圖一億の人民の中、依然として約七千萬は、一個の統一的人種意
思に依つて指導せられ、さうしてこの意思は、從來、あらゆる宗教的若しく
は社會的反目乘離よりも強いことが示された」

と。ハウスホーファによれば、この統一的意思の存在こそ、日本の發展の秘
密である。彼は日本の地理的、政治的、社會的諸條件が、日本の繁榮にいくた
の好條件を提供してゐたことを詳細に分析論證しつつ、しかも

「それ以上に決定的なるものは、若返つた國家の力強き生命意思である。そ
れは過去にあつた種々なる宗教的障礙や階級分裂に依つても依然として挫か

れず、一切の國難に對する最も鋭き本能に依つて拍車をかけられ、さうして
偉大なる國際的指導の諸理念の負擔者たるべき天職を有する、といふ信念に
於て絶頂に達する、一箇の形而上的に根差を固めた祖國愛に依つて荷はれて
ゐるものである」

と説破してゐるのである。だがそれでは、一體世界の指導者たる信念にまで
高められる「一箇の形而上的に根差を固めた祖國愛」は何によつて生ずるか？
ハウスホーファは、白人種による有色人種の差別待遇に關し、「日本は常に之
を考へ、さうしてなるべく少く之を口にするであらう」といひつつ、しかも白
人種がこの日本の態度を輕視することの危険を指摘して、「戦争は、日本が眞
に已むを得ざる場合、外部よりこの問題に於て彼に押し被せらるる場合に之を
敢てするであらう。しかしながらその時には、被壓迫者の爲めの純然たる防衛
戦の先鋒として、随つて恐るべき防禦力と國民的團結とを以て登場する地位の

中へ身構へるであらう」と警告した。同様にして彼は、外國勢力の背景を藉りて、支那が強要せんとした排日政策の誤謬を指摘し

「しかしながら此處に一箇の觸手禁制（われに捫ること莫れ）の聖物が横はつて居た。此處に一塊の熱鐵が横はつてゐた！ 觸るるものは罰があたり、火傷しなければならぬ。如何となれば、此處に自らが認めて居る生存問題の爲めに、日本が必ず、しかも、其の中途半端な外交的駆引が多く恃みとするに足らざる以上、全力を以て、この目標の爲めとあれば容易に煽り立て得らるる其の民族精神の全面的烈火を以て戦ふことは極り切つたことであつた」

といつてゐるのである。然らば日本人の祖國愛とは、かくのごとき自己防衛と生存問題に由來する力學的な反撥力にすぎないか？ もとより答は否であつて、ハウスホーファは支那における中央集權運動の失敗に言及しつつ、正しく

も日本の傳統の眞姿を、次のやうに捉へたのである。

「暫時の間北京に於ける戰勝黨は、かくも支離滅裂に陥つた國家を再び整頓せんと努力した。さうして其の軍事的傀儡師達は、身振澤山に、若し地方軍隊の解散が考慮せらるるならば、彼等は喜んで隗より始めるであらうと揚言した。しかしながらシーザーが果して眞に彼れの軍團を解散し得るであらうか？ 勿論日本に於ては嘗て約二百八十六の小さき封建侯伯、大名達が其の軍隊と艦隊とを自發的に抛棄して中央權力、すなはち天皇の大權に奉還し、これを強制しなければならなかつたものは、その中僅に十二諸侯に過ぎなかつた。しかしながら想へ、幼き天皇は、未だ嘗て一敵の足跡にも汚さるることの無かつた國土に於ける連綿二千六百年に垂んとする皇統の侵すべからざる日嗣の御子であつた」

と。このいまだ嘗ていかなる民族も、いかなる國家も經驗し得なかつた、萬

世一系の天皇を仰ぎ奉る日本の歴史においてのみ、搖ぎなき統一的意識が確定され、その故にまた搖ぎなき秩序が打ち樹てられる。世界の指導者たり得るものは、まさにこのやうな民族のみであつて、區々たる物質力の均衡に安定せる秩序の根源を求めざるを得ない西歐社會が、不斷の動搖と混亂の暴威に曝されることは、如何ともし難い事實であつた。日獨伊三國同盟は、かくのごとき日本との固く結ばれた提携によつて、失はれた安定を回復し、發展の原動力を得ようとする新生ヨーロッパの希望を示すものなのである。

☆

支那事變の發展的遂行と、日獨伊三國同盟の締結、對米英宣戰の布告にいたる道程は、新しい日本神話が創られてゆく過程であつた。彼我の物質的勢力と利害を較計し、そこに戰爭の歸趨と政治の向ふべき方向を定めようとした、國

籍なき政治的經濟的合理主義者といへども、日本民族の精神的能力を認めなかつたわけではなかつた。だが彼等の最大の誤謬は、その精神的能力を過少評價したことにあるのではなくして、絶對なるべき日本精神を相對的なる存在として捉へ、却つて相對的なる物質力を絶對的なる存在として捉へんとしたところにあつた。

わが陸軍の戰略的寶典たる「作戰要務令」は「綱領」第六に
 攻撃精神ハ忠君愛國の至誠ヨリ發スル軍人精神ノ精華ニシテ鞏固ナル軍隊志氣ノ表徵ナリ武技之ニ依リテ精ヲ致シ教練之ニ依リテ光ヲ放チ戰鬥之ニ依リテ勝ヲ奏ス蓋シ勝敗ノ數ハ必ズシモ兵力ノ多寡ニ依ラズ精練ニシテ且攻撃精神ニ富メル軍隊ハ克ク寡ヲ以テ衆ヲ破ルコトヲ得ルモノナレバナリ
 と斷じてゐるが、「忠君愛國ノ至誠ヨリ發スル軍人精神ノ精華」が大本であつて、その大本確立して、はじめて他の諸要素の充實し得る所以を闡明して剩

すところがない。然るに西歐的合理主義をもつてすれば、強固なる精神も優秀なる兵器を俟つて、はじめて戦鬪力を發揮し得るとし、肉弾をもつて戦車にあたるべからざる所以を説くのである。だが盡忠の至誠なくして、いかにして特別攻撃隊の真珠灣攻撃が計畫され得たか？ 精銳なる武器は精銳なる精神によつてのみ出現し得るのであり、わが忠勇なる兵士をして支那事變當初機械化兵器の不備を嘆ぜしめたものは、實に物質力の優位を主張せる市場主義的打算の徒が、滔々たる軍縮の風潮に乗じて軍事豫算の負擔を回避せる罪に歸すべきであつたことを想へ！

精神力のみをもつて巨大なる物質力に抗すべからざるを説くものは、強力なる物質力は強力なる精神力によつてのみ現實化し得ることを理解しなかつたのである。即ち精神こそが絶対であつて、物質は相對的なるものなのだ。不沈戦艦プリンス・オブ・ウェールズが何故に沈んだか？ 難攻不落のシンガポール

要塞が何故に陥落したか？ 日本精神の絶対を信じ得るのみが、この疑問に答へ得るであらう。精神なき科學の確實性を信ずることの愚を、いまこそ悟るがいい。科學的法則は人間精神の外にあるものではなく、人間精神の中にある。經濟的利害の較計は、それ自體として合法則性を主張し得るものではなく、正しき精神との結合においてのみ容認され得るのである。

既に昭和元年十二月二十八日「踐祚後朝見ノ儀ニ於テ賜リタル勅語」を拜するに

軌近世態漸ク以テ推移シ思想ハ動モスレハ趨舍相異ナルアリ經濟ハ時ニ利害同シカラサルアリ此レ宜ク眼ヲ國家ノ大局ニ著ケ舉國一體共存共榮ヲ之レ圖リ國本ヲ不拔ニ培ヒ民族ヲ無疆ニ蕃クシ以テ維新ノ宏謨ヲ顯揚センコトヲ懋ムヘシ

と仰せられてゐるのであるが、趨舍相異なり、利害同じからざる思想と經濟

を、如何ともし難い現實として承認し、そこに社會發展の「法則」を打ち樹てようとするところに、西歐分析科學の明瞭な限界があつたといはねばならぬ。明治天皇「億兆安撫國威宣布の御親諭」に

今般朝政一新の時に膺り天下億兆一人も其所を得ざる時は皆朕が罪なれば今日の事朕自身骨を勞し心志を苦め艱難の先に立ち古列祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ始めて天職を奉して億兆の君たる所に背かざるへしと親諭し給ひ

朕ここに百官諸侯と廣く相誓ひ列祖の御偉業を繼述し一身の艱難辛苦を問す親ら四方を經營し汝億兆を安撫し遂には萬里の波濤を拓開し國威を四方に宣布し天下を富岳の安きに置んことを欲す

と仰せられてゐるのを拜するるとき、一億の赤子の心奥にこみ上げてくるものは、ただみたまわれの感激のみである。同じくその御親諭に

竊に考るに中葉朝政衰てより武家權を専らにし表には朝廷を推尊して實は敬して是を遠け億兆の父母として絶て赤子の情を知ること能はざるやふ計りなし遂に億兆の君たるも唯名のみになり果て其か爲に今日朝廷の尊重は古に倍せしか如くにて朝威は倍衰へ上下相離るること霄壤の如しかかる形勢にて何を以て天下に君臨せんや

と聖慮を蔽ひ奉るものの不忠を説き給ひ

汝億兆舊來の陋習に慣れ尊重のみを朝廷の事となし神州の危急をしらす朕一たび足を舉れば非常に驚き種々の疑惑を生し萬口紛紜として朕か志を爲さざらしむる時は是朕をして君たる道を失はしむるのみならず從て列祖の天下を失はしむる也汝億兆能々朕か志を體認し相率ゐて私見を去り公儀を採り朕か業を助けて神州を保全し列聖の神靈を慰し奉らしめは生前の幸甚ならんと仰せられてゐるのを拜承し奉るとき、誰が感奮せざるものがあらう。この

聖慮を奉じてみたみわれの傳統に生きるとき、そこに昭和十六年十二月八日、全世界を震撼せる特別攻撃隊の武勳が生れ、日本必勝の信念が凝結するのである。

☆

神洲の地、いかにしてそこに「危機」があり得ようか！ 趨舍相異り、利害同じからざる思想と經濟が地を蔽ひ、一身の利害をもつて國家の利害にかへんとする幕府的觀念が天日を隠すとき、そこに幕府的日本の危急存亡が問はれるにいたる。その故にわが國運回天のときは、必然に國體の明徴が叫ばれ、肇國の精神への復歸が唱へられるのである。神洲の危急を知るとき、それは即ち神洲の地滅ぶべからざるを知るときであり、寶祚無窮の御神勅は、今日なほ牢固として日本の歴史のなかに生きる。

日本經濟のことは、もはやかの「經濟法則」の能くこれを闡明し得るところではない。眼前「日本資本主義」の全權獨裁は、かの武家政治の醜刻の様相を呈し、これに乗ずる米英の對日謀略は、まさに「日本」の滅亡を導かんとするかにみえたのであるが、叡慮兆民を物質的相剋の苦しみより救ひ給ひ、斷じて日獨伊三國同盟の締結を御親裁あらせられ、對米英宣戰布告の大詔を渙發し給ふ。皇軍の精銳四海を壓して、磐石のごとく搖ぎなし、まことにこれ、みたみわれ生けるしあるときに遭ひ、日本神話の今日に成るを知る。

「美しき日本經濟」の想念はここに生れたのである。しかもこれは出發點たるに止まつて、大いなる日本神話の形成は、まさにこの書物の結論として書かれたこの序文の最後に行からはじまる。その意味でこの書物は、外に向つてする批判の書であるよりは、筆者の思想的自戒の記録にすぎない。敢て誇るに足るどころか、自らの未熟の告白といふほかはないが、新らしい世界の秩序は、何

よりもまづ一人の人間の覺醒にはじまることを想ふとき、共感の知己を得て、相携へて新日本建設の多難なる鴻業の捨石ともならんがために、これまでに發表した小論のうち舊著に未採録のものを編輯して、上梓することに決心したのである。

昭和十七年六月八日稿

千葉縣市川の假寓にて

西谷彌兵衛

目次

序

科學と資本主義

I 偶像日本に君臨す	三
市場の偶像	五
學問の偶像	一〇
新らしき價值生産へ	一七
II 企業合同と技術の地位	二
企業合同の經濟學	三
企業合同の推進力	六
後退する技術	三

起ち上る中小工業……………三五

企業合同を決定するもの……………三九

Ⅲ アメリカの解體……………四三

 罷業アメリカを蔽ふ……………四五

 技術的合理主義……………四八

 アメリカ的技術の自殺……………五一

 人間と機械の統一……………五五

Ⅳ 技術史と軍事技術……………六一

 軍事技術の相對性……………六三

 軍事技術の發展法則……………六五

 日本軍事技術の性格……………六七

 方法論の顛倒……………七〇

Ⅴ 日本科學の形成……………七五

偽られたる近世史

日本科學は成立するか……………七七

純正科學と應用科學……………七九

科學論に非ざる科學論……………八三

科學の特殊性と普適性……………八四

科學を支へるもの……………八九

日本科學の確認……………九二

Ⅰ 經濟史への反省……………九九

 新秩序と二つの經濟史……………一〇一

 經濟と經濟學の偶像について……………一〇四

Ⅱ 窮乏と富強……………一〇九

 グレシヤムとエリザベス……………一一一

スチニアート家の人々……………一七
 クロムウエルの幻影……………一三三
 シテイの勃興……………一三六
 Ⅲ 詐取された勝利……………一三七
 王政復古の財政論……………一三九
 チャールズ二世の挑戦……………一四四
 王權の没落……………一五四
 Ⅳ 思想戦線の結成について……………一六七
 ケネートとそのグループ……………一六九
 ブルボン王朝と絶対王制……………一七一
 諸國民の富……………一七五
 帝國と植民地……………一七八
 適當な時期に適當な條件で……………一八二

美しき日本経済

「敵」の錯誤……………一八五
 フランスとアメリカ……………一八九
 V 國家の利益と榮光について……………一九三
 國家の榮光について……………一九五
 言ひわけの仕方について……………一九九
 失敗の種について……………二〇三
 不平と裏切りの原因について……………二〇五
 戦争と準備について……………二〇八
 1 英米ニツポンを包圍せんとす……………二一五
 英米は挑戦する……………二一八
 アメリカの福音書……………二三〇

東洋のマチノ・ライン……………三三四
 二十世紀の偶像……………三三六
 II 資産凍結以後のアメリカ……………三三一
 III 戦ふ三國樞軸……………三四三
 金融帝國アメリカ……………三四五
 アメリカの世界計畫……………三四八
 西歐ルートへの制壓……………三五〇
 果敢なる對敵行動……………三五三
 IIII ホモ・エコノミカスの追放……………三五五
 動物と機械の社會について……………三五七
 荒涼たるアメリカ……………三五九
 物質の秩序……………三六一
 人間の發見……………三六五

ホモ・エコノミカスの追放……………三六八
 V 戦争と統制經濟……………三七二
 國家經濟の粹……………三七三
 戦争經濟の發展……………三七六
 VI 世界市場と日本經濟……………三八一
 計畫經濟と新體制……………三八三
 世界市場と日本經濟……………三八七
 VII 經濟新秩序を支へるもの……………二九三
 「資本主義聯合」論について……………二九五
 市場と國際金本位制……………二九九
 アジア經濟の復興……………三〇一
 VIII 國家資本の史的性格……………三〇七

Ⅷ 國防要請と幕府の没落……………三〇九

Ⅷ 國家資本の發足……………三二二

Ⅷ 日本經濟戰爭の推進力……………三二七

Ⅷ 經濟新秩序を護るもの……………三三三

Ⅷ 總動員體制進展の意義……………三三七

Ⅷ 舊き觀念の粉碎……………三三九

Ⅷ 總動員體制と國體明徴……………三四四

Ⅷ 總動員體制進展の方向……………三四八

Ⅷ いはゆる自給經濟論について……………三四三

Ⅷ 消耗戰爭と資源戰爭……………三四四

Ⅷ 理念なき經濟の衝突……………三四八

Ⅷ 手段と目的の顛倒……………三五二

Ⅷ 英米の秩序の否定……………三五四

Ⅸ 大東亞戰爭と經濟建設……………三五九

Ⅸ 戰爭と經濟の分離……………三六一

Ⅸ 國籍なき經濟學……………三六五

Ⅸ 經濟のための戰爭の否定……………三七〇

Ⅸ 純乎たる日本經濟のために……………三七三

Ⅸ 大東亞建設の諸目標……………三七七

Ⅹ 大東亞の戰勝を貫くもの……………三八三

Ⅹ 日本認識の確立……………三八五

Ⅹ 「日本」は躍進する……………三八八

Ⅹ 醜の御楯……………三九二

Ⅹ 「作戰要務令」の示すもの……………三九五

Ⅹ 戰爭目的の闡明……………三九八

科學と

資本主義

I 偶像日本に君臨す

メフィストフェレス

お前は何だ？

日本人

日本人だ。

メフィストフェレス

ふん、お前も人間か？

日本人

いや！

日本人だ！

ソクラテス 併し、愛するクリトンよ、なぜ我々はそんなに多数者の評判を気にしなければならぬのだらう。もつと願慮に價する識者達は、實際あつた通りのがあつたのだと信するだらうぢやないか。(「クリトン」岩波文庫版)

市場の偶像

ひとつの迷夢が世界を蔽ひ、ひとつの偶像が世界を支配した。ひとたび資本主義的市場が成立するや、市場は逆にそれを成立せしめた母胎たるもろもろの地盤に反噬する。それは國家を震撼し、生産機構の心臓を扼し、學問を規制し、技術をその下僕とする。一切の價値は市場價値即ち價格に還元することによつてのみ理解されはじめ。十九世紀の後半以來、愚昧なる大衆の信條は「市場」であつた。「多数者の評判」は、取引所がこれを代表したのである。市場は世界の凡てであり、學問は市場的概念の凝固物なのであつた。

偶像に本日君に臨す

市場を支配するものは、かくて世界を支配する。而して市場價格のみが價値とされる以上、市場の支配者は、價格の源泉たる貨幣の支配者たるにほかならぬ。金融資本は世界に君臨する。貨幣はいまや少数者が、愚昧なる大衆を統治せんがための手段たるにすぎないのである。曾ては新

らしき價值創造の聖業であつた生産は、いまや貨幣差額を實現せんがために、他人を瞞着する手段たるにすぎぬ。價值給付の手段たりし商業は、需要と供給の偽造者として投機的貨幣利潤を追ふものにすぎぬ。何ものをも生産せず、何ものをも給付せず、他人の損失においてのみ利得する取引所經濟の發展は、まさしくかゝる經濟體制の最高の表現であり、そこでは「多數者の評判」そのものすら完全に捏造され、しかも實現されるのである。

ひとつの示唆。

——アメリカの自動車工場あたりでは、工作機械の相當使へるものが、一臺三千ドルも出せば買へるから、それを使つてゐる。職工の給料が一時間當り大體七十五セントとしまして、相當使へる機械一臺分が給料の四千時間分です。——日本へその三千ドルの機械を持つて來ますと、荷造り、保険料、運賃を拂ふと、五倍になる。一萬五千圓になる。日本製の機械を買ひますと、とても一萬五千圓では買へない。約二萬圓近く掛る。それを使つてゐると、職工は大體一時間二十五錢と見れば充分だと思ひますが、さうすると約六萬時間セーブしないと機械一臺の原價償却が出来きない。——それで向ふでは四千時間節約出来る見込みがつけば、機械一臺買へる。こつちは六萬時間節約することでないともよつと機械一臺買へない——「現地報告」第四二號「技術家

の見たアメリカ」座談會より

こゝに「市場」に緊縛された人間がある。人間労働も機械も、こゝでは一樣に商品である。その時、生産とは價值の創造ではなくて、貨幣と労働商品との交換市場の謂ひにほかならないのである。

重要な問題——資本の利潤率は略々同様であるに拘らず何故にアメリカの労働者が本邦労働者の十倍の賃銀にありついでゐるかは、論議の埒外に置かれてゐる。もし労働生産性のみに着目すれば、同一の労働用具を使用する労働者は、同一の價值を生産し得ることはいふ迄もない（殊に右に例としてあげられたやうな、いはゆる Single Purpose Machine の場合は、労働の熟練度の重要性が低下するため尙更さうである）。然らばアメリカの労働者が四千時間に實現し得る價值生産は、本邦労働者もまた四千時間を以て實現し得べく、しかもその労働の價格が十分の一であるとすれば、右に述べられた計算は全く逆轉せざるを得ないのである。日本ではヨリ容易に新しい機械が採用される筈でなければならぬのだ。

問題の核心は、次の點にある。即ち第一に六萬時間の労働節約の見込みがなければ、一萬五千圓の機械が買へないのでなくて、却つて一萬五千圓あれば六萬時間の労働が買へるといふこと

だ。六萬時間の低能率労働は、四千時間の高能率労働に匹敵するか、或はさらにより多くの價值を生産するであらう。投下される貨幣資本は同量であり、しかも固定せず、加ふるに長期に亙る分割支拂ひが可能であるとすれば、市場の人間がこれをえらぶに不思議はない。市場が人間を支配する。人間は商品に轉化する。國家と人間の福祉は、資本市場における打算の中に閉ぢこめられるのである。

だがそれにしても、低賃銀といふものが、劣悪な設備を以てアメリカ的大量生産と世界市場で角逐し得るほどに強力な武器であるとしたら、同一の生産設備を以てこの低賃銀を援用したらどうなるか？ 理論的にはアメリカ商品の完全な敗退あるのみである。しかもわが企業資本は巨大な利潤を獲得し、資本の蓄積は異常な昂進を示すであらう。しかもこのことが現實に行はれない所以のものは何か？ 一つには世界市場の英米的な獨占の結果、その市場に進出せんとする日本商品に對しては政治的な價格が設定され、日本が買ひつけようとする工業原料品に對してもまた同時に政治的な價格が強要されたことが指摘される必要がある。「安い」筈の日本製品は、海外市場では決して安くはないのだ。安南人はたとへばフランス本國製品と同じ價格でなければ日本製品を買ふことが出さない。逆にまた安南人が安く生産した農産物は、決して安い値段では日本人

の手に入らないのである。一聯の左翼的經濟論者共は、これを日本のソシアル・ダンピングと呼んだが、世界資本主義の「一環」として日本經濟社會の本質を規定しようとした、この無能なる英米的日本人どもは、日本にソシアル・ダンピングを強要した元兇がそもそも何ものであるかに著目することすらできなかつたのである。

次に英米的な世界市場の獨占は、いふまでもなく日本商品の市場に政治的な限界を強請する。日印、日濠間の通商協定のごときはその典型的な實例である。一ヶ年五十萬臺の自動車を生産するフォード工場の生産設備を日本へ持つてきたらどういふことになるか？ 忽ち「過剰生産」である。然らば徹底的な生産手段の合理化は、日本にあつては市場の狹隘さの故に不可能であるといふ結論に達するが、その「市場」は誰がきめたのだ？

これらのことこそは、日本における生産手段擴充を阻碍する問題の第二である。しかもわが國における個々の資本は、この猫の額のような市場の中で、兎も角も「平均利潤」なるものを稼いでゐる。個別資本は、低賃銀の維持が可能限り、必ずしもこの「市場」の枠と闘争する必要を認めないであらう。こゝでもまた國家と人間の福祉は、資本市場における打算の中に閉ぢこめられるのである。

もしわれわれがこのやうな市場の偶像に禮拜することを肯じないならば、話は全く別である。ヨリ高價な生産手段を採用し、貨銀を上昇させ、物價を引下げ、しかも且つ巨大な資本の蓄積を成就し得る可能性がいつでもわれわれの前に待ち受けてゐるのだ。國際資本市場および國際商品市場における獨占的支配がアメリカの高貨銀およびアメリカ的技術の基礎であつたことを、われわれは忘れて置かう。市場的人間の排除——それが我が國産業の生産力増進の第一段階でなければならぬ。しかもそのことは同時に、アメリカ的技術を凌駕し、多數者の迷妄を打ち破つて、新らしき經濟の秩序を打ち樹てるただひとつの手段であらう。

學問の偶像

自然の資力を限りあるものと決めてしまふことをやめようではないか。それは無限である。就中偉大なる技術の助けを得てゐる場合には。——ド・ラ・メトリー

第二の示唆——ナチス・ドイツのK・D・F國民自動車。

——一九三四年ヒトラーは、自動車工學の權威者ポルシエ博士とウエアリン氏をベルリンのホ

テル・カイザーホールに招き、その計畫を述べて、エンジンの冷却方法、價格低減と燃料消費の減少、輸出の可能性等についてその意見を開陳し、ポルシエ博士をして、極度にその廣い知識と偉大なる獨創力に感嘆せしめたのである。——かくしてポルシエ博士を主任として、スツットガルトに國民自動車研究工場を設け、一九三四年よりその設計に着手せしめ、一九三五年には既にその豫備設計を終了し、次で幾多の設計變更を行ひ、その形式がほぼ決定するにおよび、一九三七年のはじめにはヒトラー總統の命令により——國民自動車準備會社をスツットガルトに設立したのである。その間一九三六年には既にV三型を製作し、同年十月より十一月までに各種の道路において五萬軒の走行試験を行ひ、満足すべき結果を得たので、さらにVW三十型國民自動車三十臺を製作し、一九三七年四月一日より三九年まで四年間に、實に二百萬軒の走行試験を行ひ、一九三八年にその形式を最終的に決定するに至つてゐる。——一つの自動車の研究にかくの如く徹底的に豫備試験を行つたことは、世界にその前例がないのである。

〔日本評論〕昭和十六年二月號、山本峰雄氏「獨逸自動車化」

我々はこゝに、資本主義的「市場」と、貨幣差額の論理を超克し、新らしき世界を建設せんとする強烈な人間の意志の發現をみる。より良きものを創造せんとする「經濟外的」な意志が經濟

と、それに奉仕する技術の在り方を規制するのである。

海の彼方、アメリカでは反対に良きものが悪しきものによつて驅逐されつゝある。嘗ては全アメリカを席捲したフォードが、何故にシボレーにそのお株を奪はれたか？

——フォードはエンヂニアといふやうな人がよく買ふんです。性能の上からいつても、値段の上からいつても宜しい。ところがシボレーは中の内限りが立派だとか何とか女向きにするんださうです。奥さんが少しの権力の強い家では、どうもシボレーを買ひたがる——毎年新車の発表を秋から暮にかけてやるんですが、集まつて来るのは大部分女子供です。そして車を選んで家に歸つて親父をせめるといふわけですね——（前掲座談會）

空冷四氣筒九八〇C・C、二三・五馬力のエンヂンを持ち、ブナ（人造ゴム）製のタイヤを裝備した、價格九九〇マルク（リムージン型）の國民自動車は、ことばの持つとも深い意味でナチス・ドイツの産物である。技術といふものが、ゾンバルトのいふごとく人間の「有機的な諸制限からの解放」であるとしても、それはいつ、いかなる場合でもさうではあり得ない。現にアメリカ的メカニズムは人間の「有機的な諸制限からの解放」であると同時に、人間の無機物への轉落であつたのである。（本書「ホモ・エコノミカスの追放」参照）

ヒトラーはドイツを自然の資力の制限から解き放つと共に、英米を支配者とする資本家的市場から解き放つべき新しい經濟の創建に邁進し、それに成功せんとしてゝある。だがこのやうな體制の確立はもはや經濟と技術それ自體の論理の中においては不可能であらう。なぜならば彼等の體制のまゝでは、利潤獲得の機會が全く絶望状態に陥らない限り、舊き秩序に住む人々は「現状」を支持し、その限界を以て經濟一般と技術一般の限界であるとお説教することをやめないであらうからである。

支那事變の勃發以來既に四年、われわれはいくたびかこのやうな限界論に遭遇した。曰く經濟力の限界、曰く技術の限界、曰く國力の限界等に。しかしもはや自分の能力に限界を附することはやめようではないか。就中われわれが今日に置かれてゐる状態の、眞實の意味を知るならば——われわれは市場的人間の言ふことに信を置いてはならないのである。いま眼前に眺めつゝあるものは、世界經濟と技術の諸關係を支へてきた歴史的・地理的な構造そのものが顛覆しようとしてゐる事實である。この事實を素直に承認するものは、直ちに英米的世界市場の崩壊と、それに繼起する新らしい世界への前進を、迷ふところなく認識することができるのである。

だが世上屢々散見する流て者のために一言いつて置かねばならぬことがある。西部戦線におけ

るドイツの壓倒的完勝が傳へられるや、轉向「市場主義者」共とお人好しの「識者」達は、これを「ドイツ技術」の勝利なりとして盛んに提灯を持ちはじめた。ところがその結果は、問ふに落ちず語るに落ちるの類ひでドイツ技術に遙かに及ばざる日本技術の「現状」を概嘆するに終つたのである。のみならずこの情勢に却つて力を得た英米的日本人共は一方に日本の科學的技術的低位を尤もらしい憂國的レトリックを以て喋り散らすと共に、他方ドイツ技術そのものがナチスによつて追放されたユダヤ人科學者の「科學的遺産」の恩恵に基くものであり、いまやそのユダヤ人を追放せるドイツ技術が、發展の限界に達しつゝある旨を強調しはじめたのである。(石原純、中谷宇吉郎など、いふ人々の言説に注意を拂はれるならば、讀者は直ちにこのことを了解されるであらう。その他有象無象の「科學者」共のお喋りは、指摘するまでもない。)

しかし我々はかういふ慌て者の言葉に耳を藉す必要はない。「科學」の名の下に國を賣りとばす「科學者」共はドイツにとつて必要がないばかりか、無用有害の存在であつたことはいふまでもない。そんな「科學」や「科學者」は、國際的金權主義の御用提灯となるだけのものである。問題は「ドイツ技術の勝利」と日本だが、日本技術がドイツ的段階に達するまでは、新秩序の建設も、戦争の遂行も、難かしいことのやうにいふとすれば、それは全く論理の顛倒といふものであ

る。人々は先づヨーロッパなどいふところは、本來アジアの一半島にすぎず、自然的條件にも恵まれない荒涼たる一地方にすぎないことを正當に理解しなければならぬ。西歐諸國の近世的な繁榮は、その科學と技術と文明の高度の故ではなく、世界植民地の荒廢の上に成立した繁榮でしかなかつた。そもそもその科學と技術と文明そのものが、植民地的領有の産物であり、寄生物であつたのである。そのとき、植民地的方式によることなしに、このヨーロッパ的地盤の上にドイツが新秩序を打ち樹てようと考へるならば、このヨーロッパの地理的自然的條件の人為的修正を先行的な條件とするほかはない。機械工業と有機合成化學工業の推進によつて、地理的・自然的諸制限から自らを解放すること——それがドイツにとつて可能なただひとつの新秩序への途であり、また植民地國家に對する戦争能力培養の途であつた。

われわれの場合にあつては事情はまさに反對である。支那本土のみを以てしても優に全ヨーロッパに匹敵し得る面積を持ち、まして南に印度、濠洲、ニュージールランドを指呼の間に望みつゝ、南太平洋を圍繞する佛印、タイ、ビルマ、マレー半島、蘭印、英領東印度までをわが經濟圏と考へるとき、その廣茫たる面積と資源の豊富さにおいて、まさしく世界に冠絶するものがあること論を俟たぬところである。しかもこの地方たるや英米的民主主義國家のアキレス踵たる地方であ

り起ち上るや直ちにこのアキレス腱を断ち得る日本の不敗の強味は、ナチスの歐洲新秩序計畫の諸制約とは比すべくもないのである。

すでに前述のごとき英米の植民地市場体制にして顛覆せしめられるとするならば、彼の崩壊と混亂は火をみるよりも明らかであり、しかも我にあつては「ソシアル・ダンピング」の桎梏を打ち破り、急速な資本蓄積を可能とせしめられる。かくして技術の國家的育成は、豊饒なる物質的・人間的地盤の上に加速度的な發展を開始するのである。

誰か長期消耗戦の不利益を説き得るものがあらうか。いみじくもヒトラーによつて引用されたごとく、不正打破のため「目には目を、齒には齒を」以て進まざるを得ない事態が現出するとしても、西太平洋における帝國海陸の精銳は、敵の跳梁を許さざるものがあり、瞬時にして擴大すべき廣地域日本經濟圏を背景として決戦體制に出んとするわが威力を前にして、長期消耗戦の打撃を痛感するものありとすれば、それこそわが敵性國家にほかならぬこと明白である。さればこそ獨伊兩國はわが國と鐵の盟約を結び、歐洲新秩序計畫をして東亞新秩序計畫に聯繫せしめんとしたのではなかつたか。躊躇なき前進こそがわれわれのなすべき一切であり、内省と自己批判はことの前進の過程においてのみ、はじめて建設的な積極性を持ち得るのである。

われわれが打ち破るべき最初のものは、矮小な自己侮蔑的な學問の偶像でなければならぬ。新秩序は必然に觀念の變革を要求するからである。

新らしき價值生産

いまや注目すべき事態がわれわれの前にある。街のニュースは、いはゆる新興コンツェルンの悲境を傳へる。昭和電工コンツェルンの總帥森島昶は、さきに昭和鑛業を帝國鑛發に明け渡し、次には本城昭和電工を鈴木忠治(味の素)とシ團代表の手に委ね、閑職日本肥料社長を最後として來るべき春をも待たず忽然として逝く。日曹の關將中野友禮に昔日の面影いまはなく、科學主義工業の旗頭大河内正敏また日夜奔命に疲れて、僅かにウキスキーに憂を遣るといふ。悲境のよつて來る所以は何か。傳へていふ。人的スタッフの缺乏、急激な膨張政策、事變の深化に伴ふ原料の入手難、そして資金難——等々。

苦難はしかしひとり新興コンツェルンに止まらない。多年その堅實さを誇り、資力を誇つて來た既成財閥陣營もまた、親會社の改組、外部資本の導入、國家信用への積極的依存、傘下企業の編成替等慌しい變貌の過程を辿りつゝある。嘗ては金融資本の牙城と謳はれた既成財閥が、いま

や資金調達に狂奔し、三菱重工業の例にみられるやうに、總動員法に縋りついて國家信用の供與を得んとするに至つては、まさしく瞠目すべき事態といはねばならない。

これら新舊兩財閥の異變が意味するものは何であらうか。一言にしてこれをいへば、市場主義的性格の清算である。新興コンツェルンを目して技術主義的コンツェルンであると考へようとした陳腐な認識は、再吟味されねばならぬ。もしそれが技術主義的であつたとしても、市場の枠の中に限局された技術を母胎とするものであり、自ら市場を創造し、これを支配するものでは決してなかつたのである。理研コンツェルンにしてからが、市場主義的學問の典型たる帝大的アカデミズムの奇臭い研究室の所産でしかないことを思へ！ 既成財閥のなかに大きな比重を占めてゐたものもまた同様に市場主義的技術に依存する諸企業と、全く市場的性格を以て貫かれてゐた金融と商業なのであつた。

第三國貿易ルートの梗塞は、これらの市場主義的企業から再生産の技術的手段獲得の途を塞ぎ對外商業の可能性を切斷し、戰爭經濟の要請は、眞正の價值給付以外の投機的利潤の實現を停止せしめる。戰爭國家への關心は、偽造されたる需要に基く貨幣差額の實現ではなくして、眞實に價值あるもの、無限且つ絶對的な需要を創り出す。一切の經濟機構は、あげてこれらの與件を満

足せしめる限りにおいてのみ、存続と繁榮を許容されるのである。

貨幣利潤追求の可否に關する「論争」などは、いまや無益であらう。價值を生産し、價值を給付し得るものゝみが存在理由を獲得する。市場價格は、いはゞ國家價格によつて置き換へられる商業的打算は影をひそめざるを得ない。資本の偉力は眞實に價值あるものゝ偉力によつて置き換へられねばならぬ。減産を楯に利潤を擁護せんとするものは、新しい技術の國家的育成と、顧慮するところなき廣汎な國家的採用によつて自潰せざるを得ないであらう。利潤は價值創造と給付との結果であつて、目的であり得ない。アメリカ的市場主義との抗争は、このやうな市場主義の否定によつてのみ可能となる。自らもまた市場主義的地盤の上に立つて、東亞の新秩序を思念し國內經濟の新體制を考へようとするこの、顛倒的な錯誤は、いまやハツキリと知られねばならないのである。愚かしい評論家共は、自分達の立場では物事が仲々思ふ通りにゆかないと弱音を吹いてゐるだけであつて、そのほかの立場があり得るかどうかを考へてみようとはしないだけの話である。現實は彼等を置き去りにして前進をはじめてゐる。

—十六年三月稿—

I
企業合同と技術の地位

企業合同の經濟學

支那事變の長期化に伴ひ、産業界は幾多の問題に當面するにいたつたが、そのひとつの場合としてとり上げることができるのは、企業合同の促進である。しかしながら周知のやうに、企業合同はひとり支那事變下のわが國經濟界においてのみ特徴的に現はれたものではなく、むしろこれを他面からいへば資本主義經濟の發展史そのものは、企業合同の歴史そのものであつたといふことも出るのである。そこで特にいまの場合に企業合同の問題をとり上げるについては、今日當面してゐる企業合同の進展が、資本主義的なそれとどのやうな意味で異つてゐるかを考へてみなければならぬ。問題の特殊性を正當に把握することのみが、正しい解決の途を發見する可能性に導くであらうからである。

従來の企業合同の歴史を顧みて、その本質的な契機をなしてゐたものは、やむところなき利潤追求の精神であつたことは何人もこれを承認するところであらう。かの王子製紙の樺工合併問題にしても、合併の仲介者たる池田成彬が藤原銀次郎に獨占資本的横暴を慎しむべき旨一本釘をさしたといふ巷間傳へられる挿話が事實であるにせよ、無いにせよ、巨大企業間における競争を終

熄せしめ、以てより安定した、またより多くの利潤を獲得せんとする資本の要求を表現してゐたことは否み難いところである。試みに従來の企業合同の特徴的性格を條件的に列挙してみるとおよそ次のやうになる。

- 一、競争者の克服——競争の當事者間の自發的な「合意」による企業合同もあり得るであらう。しかし多くの場合競争に堪へ得ないで刀折れ矢盡きた經營者が、相手方の軍門に降るのが典型的な事例である。
- 二、獨占の形成——右の形態がより積極的に、且つより高度に押し進められた時、それは獨占の形成となつて現はれる。弱小經營の吸収併合はこの場合にもつと苛烈に遂行される。
- 三、資本的優位の獲得——直接に競争者の排除が目的とされない場合でも、資本的側面における利便を獲得するためには大資本を以てするが好都合である。即ち銀行からの借入れ、株式操作等資本市場における「信頼」を得るためには、小資本小經營の不利はいふまでもない。自由經濟下において信用は一に物的條件に依存し、物的條件における最大の要因は擔保物件、即ち資本額の大小でなければならぬのである。
- 四、金融資本の支配的役割——資本信用における右のやうな状態は信用の供與者たる金融資本の

側から信用供與の條件として企業合同による資本力の増強を要求せしめる原因となる。また債務支拂の滞滯を契機として、企業の整理が金融資本の側から要求され、その整理の手段として企業合同が行はれることも甚だ多い。優劣相異なる企業の合同に際して、兩社間の株式引換比率を任意に切り下げることによつて、減資と同様の効果を齎し、しかも株主、一般債權者に納得し得べき安全感を抱かしめることができるのは周知のごとくである。

これらの企業合同の持つ性格を別の言葉で表現すれば、それは非常に「市場的」であるといふことも出きよう。即ち自由經濟のもつとも重要な場面は「市場」であつて、その意味からいへば、自由經濟におけるあらゆる問題は「市場」の問題に還元することが出来る。市場における有利な地位を獲得することなしには、他のあらゆる企業家的努力も瓦餅に歸するほかはない。競争者の排除、獨占の形成は商品市場における自己擁護にはかならず、企業家側における資本的優位の獲得と、金融資本の支配的役割とは、資本市場における企業の地位を示すものにほかならない。そのやうな企業合同の性格、したがつてまたそのやうな企業合同の進展を樞軸として發展してきた自由經濟の性格そのものは、これを「市場」的な觀點から捉へることがもつとも容易であり、またそれが問題の本質的な解明であるかのやうに思ひ込ませる可能性を十分に持つてゐたことは

明らかである。しかしそのことから警戒すべきひとつの經濟史觀が生れつゝあつたことに我々は注意しなければならないのである。

資本主義經濟の成立後、經濟史は「市場」の問題に凝着してしまつてゐる。たとへば「ブルジョア經濟學」の市場的性格を排撃して利潤の本源的な形態を生産行程の中に發見しようとした社會主義經濟學にしてからが、實は市場性から一步も脱け出てゐないことを注意するがいい。即ち例の勞働價值説の提唱と共に社會主義經濟學を貫く重要な問題は獨占資本の形成であり、「帝國主義」の發展であつた。だが價值論における勞働價值説の絶對的な支持と獨占利潤の形成或は帝國主義的な市場争奪の主張とが併立し得る理由はあり得ない。價值と價格の定義に關する色々の説明は、價值が常に交換價值として現はれ交換價值は貨幣的價格としてのみ現はれる資本主義社會にあつては無意味である。價值の根源が價格にあり、利潤の根源が餘剩價值にあるとしても、價值と價格との二元的な理解は、左翼經濟學をして徒らに兩頭の蛇たらしめるにすぎない。價值と價格が一致せず、したがつて餘剩價值と利潤とが一致しないならば、勞働價值説の主張は、結局資本主義階級打倒のための敵本主義的な論理的詭辯以外の何ものでもない。そのとき「株式取引所の經濟學」ともつとも尖鋭に對立する筈の社會主義經濟學が、實は市場主義的性格において必

ずしも異なるものではないといふ認識はこの際大切である。

既に自由經濟——企業合同の本質的な性格が「市場的」であり、これを對象とする經濟學もまたそれが「ブルジョアの」であると「左翼的」であるとを問はず「市場的」であつたとすれば、そこから出發して書かれた經濟史もまた「市場的」であつたことに何の不思議もない。「市場的」な經濟史とは何か？即ち商品市場および資本市場における諸問題を以て充たされた歴史であり、換言すれば交換經濟の歴史である。この經濟史の中においては、われわれは生産の歴史を持たないのだ。産業革命における機械の役割をあれほど高く評價し資本主義下の勞働大衆の運命についてあれほどに口喧しく喋り散らしてゐる唯物史觀經濟史にしてからが、實は生産については何ひとつ語つてはゐない。勞働を以てひとつの商品であると規定した社會主義經濟學は、生産行程そのものの中に「市場」を持ち込んでゐる。即ち生産とは勞働と資本との交換にすぎないのである。「市場的」な經濟學と經濟史は、經濟的諸問題を「市場的」な解決に導くほかはない。勞働の問題は勞働市場の問題に、資本の問題は資本市場の問題に、商品の問題は商品市場の問題に。そして近世經濟史上最大の問題のひとつである技術の問題もまた市場的な解決に委ねられざるを得ないのである。

企業合同の推進力

今日までの自由経済の下においては、技術もまたひとつの商品であつた。そのことの端的な表現は特許権と稱せられる無體財産権の成立であり、他のひとつの表現は「労働」として資本家的投資の対象となる技術労働の概念であらう。商品生産社會にあつては一切のものが商品化される科學も、文學も、繪畫も、音楽も皆然り。まして技術においてをやである。その結果は企業における技術の地位はその商品たる地位において、即ち市場的地位において決定されることになる。この場合に技術は、他の諸々の商品と同系列に置かれ、企業構成要素の一部を占めるにすぎない技術者の社會的地位の停頓、法文科系經營技術者（彼等もまた「技術者」たることに變りはないのであるが、いひ得べくんば自然科学的技術者の生産的なるに比して、市場的であり、市場的なるものゝ支配的な段階においては「有利」であつた）の社會的優位は蓋し當然の事態であつたのである。社會主義經濟學はそのやうな事態から出發して、資本主義的市場が技術的發展の桎梏となりつゝあることを説き、技術の解放を主張する。しかしこの主張は實は資本家的市場から社會主義的市場へ、換言すれば市場支配權の階級間の爭奪を唱へてゐるに過ぎず、しかも一方彼等の

いはゆる「帝國主義戰爭」を必然ならしめる國家間の市場保有の不均等について基本的な解決を與へ得るものではない。資本家國家の市場爭奪が、プロレタリア國家の市場爭奪につながらないとは何人も證言し得ないからである。

ところで従來の企業合同は、このやうな技術の市場への從屬性、生産關係の市場關係への拘り換への下に行はれて來た。恐慌をモメントとして特に著しい發展をみせた企業合同は「産業合理化」の名を以て呼ばれたにも拘らず、その「合理化」の中核をなすものは技術的要素では決してなかつた。弱小企業の整理合同による經營資本の集約化によつて資本効率を上昇せしめ、他方市場における競争者の除去によつて價格の吊上げを可能ならしめること。それが企業合同の中心的な題目であつたのである。經營資本の集約化は生産工程における技術的低位をカヴァし得る。資本金一千万圓の新鋭設備を持つ企業が年額五千万圓の生産を成就する時、同額の資本を以て三千萬圓の生産をなし得るに過ぎない企業は競争に堪え得ないであらう。しかし後者は資本金を六百萬圓に減資することによつて設備に改善を加へることなく前者に對抗する途を發見することが出来る。好都合なことに價值以下の價格で身賣りしようといふ企業は常に存在し、そのことが企業合同による「合理化」の可能性を與へたのである。同様にして企業合同は、恐慌によつて

狭められた市場の状態に對應する可能性をも與へたことはいふまでもない。

支那事變はこのやうな企業合同の性格にどのやうな影響を與へたであらうか。われわれはこれを三つの段階にわけて考察することが出来る。その第一は事變當初における嵐のやうな生産力擴充の進展に伴ふ大資本の中小企業買収であり、第二はいはゆる平和産業部門に現はれた「合理化」のための企業合同であり、第三はいはゆる統制經濟推進の一手段としての企業合同による「整理」過程の進行である。

既に滿洲事變後「非常時」の名の下に進行しつゝあつた重化學工業の躍進は、支那事變とともに爆發的な高調に達した。新設増資資本は飛躍的な膨脹をなしたが、受託に追はれた諸會社は既設工場の買収によつて生産能力の急速な増強を圖るべく、盛んに企業の吸収合併を行つたのである。昭和十四年秋、歐洲戰亂によつてポンド・ブロック向輸出が急速に減退しはじめるとまでの時期においては、「平和産業」についてもこの状態は必ずしも異なるところがなかつたといへよう。資金移動を警戒する資金調整當局の方針にも拘らず、受託能力の増大による利潤獲得を目指す輸出産業部門の企業合同は、あらゆる口實の下に實行されたのである。内需向生産は極度に制限されはじめたが、輸出に關する限りむしろ大いに奨励されたのである。

しかしながら内需向生産の制限は、他面輸出実績を持たない多くの「平和的」企業を困難に導いた。これらの企業にあつては昭和十三年秋武漢三鎮の攻略成つてしかもなほ長期化の傾向を濃化してゆく支那事變を前にして、もはや過去の蓄積を喰ひ減らしてゆく機會待ちは不可能となるに及んで、企業合同による「合理化」機運は漸次濃厚となつて來た。のみならず歐洲戰亂の深化は輸出市場に依存して來た大企業の足をも洗ふに至り、他方對支進出による内需制限の補填策も國內物資需給の緊迫によつて不可能となるに至つて、大企業の「整理合同」は次第に切實な要求となつて現はれはじめたのである。

最後に現はれたものは、統制機構形成の手段としての企業合同であつた。既に日鐵、日本發送電の建設は、統制手段としての企業合同の典型的なタイプをなしてゐたのであるが、事變の長期化が統制の必要を前に押し出して來るや、この方式の全面的な採用が統制完遂のための不可欠の手段と考へられはじめたのである。多くの共販會社の設立は、企業合同の一變形とみる事が出来るし、また現實に當局の懇懇によつて合同したものも一、二の例に止まらない。有限會社方式の採用による零細企業の結合案もまたその一例であり、最近に進行しつゝある纖維工業界の大規模な合同運動のことも、企業自體の「合理化」要求と、經濟統制の要求とが結合したものと考

へ得るのである。

後退する技術

だがわれわれはここまで来て、支那事變下の企業合同が、實は從來の企業合同と本質的に異なるものを持つてゐないことに奇異の感を抱かざるを得ない。僅かに第三のタイプが特異な性格を示してゐるのかのごとくであるが、實はこれとても市場規制を目標とする點で、それが官製のものであれ民製のものであれ、經濟的な意義はひとつであることは明瞭なのである。こゝでひとつのことを想ひ出してみよう。マンフォードはいふ――

「蒸氣力は小單位よりも大單位に於て一層能率が良かつた。……斯くして蒸氣力はマヌファクツールの過程の細分に於て既に存せし所の、大規模工業經營體への傾向を馴致した。蒸氣機關の本質に強ひられて大規模といふことが、次いで能率のシンボルとなつた。工業上の統率者達は、常に蒸氣機關により條件付けられし作業上の事實として、集中と大規模とを受け入れし許りではなく、又彼等は集中及び大規模それだけを、進歩の表象として信仰するやうになつた。大なる蒸氣機關、大なる工場、……大なる熔鑄爐に於て、能率は規模に直接比例するものと考へられた。よ

り大なる規模といふことは、より良いといふことの別の言ひ現はし方であつた。」と。(馬場敬治氏「技術と社會」第一卷より引用)

そこでは技術的要請が市場的な要請と合致してゐた。技術的能率はいはゞ市場的能率と一致してゐたのである。しかし市場の發達と經營自體の技術化は、次第に自然科学的技術を後方に押しやる。技術的能率の問題は脱落せしめられ、市場的能率若くは資本的能率(この場合はむしろ効率と呼ぶべきであらう)が前面に押し出て来る。アメリカにおける自動車工業をみよ。その發展の初期において技術的凱歌を奏したフォード・システムは、いまや單にゼネラル・モーターズ、クライスラー、フォード三社の市場戦の問題に轉化してゐる。自動車自體が技術的改善の餘地を失つた爲ではない。むしろ資本効率の問題が果敢な技術的闘争の情熱を冷却せしめてゐるのである。然るに支那事變下の企業合同の觀察は、企業推進の原動力が依然として市場的諸條件に依存してゐることを明瞭に物語つてゐる。わが國の現状が要求するところのものは、最大の生産能率であるに拘らず、企業自體は市場的利潤の確保に定着してゐるのである。そこに提唱せられる合理化とは、市場的合理化ではあつても、技術的合理化では決してない。たとへば紡績業の合理化をみよ。染色から織布に至る一貫作業の完成は、技術的見地からいつて當然要請さるべきもので

あるに拘らず、現實には却つて紡績と織布部門の分割さへ考へられてゐるのではないか。この傾向は他の部門においても同様であり、同一企業部門を貫ねる企業合同は促進され、獎勵されても、作業工程を縦に貫ねる企業合同は閉却され勝ちなのである。鶴見製鐵造船と日本鋼管の合併のごとき「技術的」合併の例は必ずしも乏しくないとはいへ、いはゆる經濟新體制の根本的方向として唱へられつゝあるものは産業別、企業別合同であることは周知のところであらう。

このやうな傾向が統制上の便宜に由來するものであることは既に述べたが、經營的見地からいつても合理的であるべき垂直結合が何故に企業家自身の採用するところとならないのであらうかわれわれは原料市場における大企業の優位、大口需要者の優位に想到することによつてこれを理解し得る。原材料市場の狹隘化するに従ひ、小口需要者の脱落は必至である。これに統制技術上の簡便さを目標とする平面的配給統制が加はるとすれば、企業合同の歸趨は自ら明瞭となるのである。

しかし技術的合理主義の地盤の上に立たぬ企業合同は、當事者自身の本質的な不利益の原因たるばかりではなく、實は統制それ自體にとつて必ずしも有利なものではあり得ない。このやり方においては、あらゆる商品の交換過程の中に統制が入り込んでゆかねばならないが、全商品の供

給量と需要量を統制者自ら別々に測定し、これを配分するといふ煩瑣な問題の發生は不可避でありしかもよしんば商品の量の決定は企業者に委ねるとしても、商品の質における問題はほとんどまったく解決不能となるのである。たとへば機械製作者の新らしい金属材料への要求は、機械製作者自らその解決に當ることをもつて最善とすることは誰の眼にも明らか問題である。對米關係の悪化に伴ひ、國內産業に要求される高度の技術的發展は、このやうな量的な、市場的な諸傾向に對して新らしい反省を促さないであらうか。

起ち上る中小工業

企業合同促進の反面において、われわれはいはゆる中小工業の没落を屢々耳にし、眼にみてゐる。從來の經濟學の公式にしたがへば、それは「必然」の成りゆきといはざるを得ないであらう。大資本は小資本に優越する——それで萬事終りなのだ。資本が技術を隸屬せしめるや、いつの間にか大資本の技術的優位といふことが盲信的となつたのである。だが、マンフォードの指摘したごとく、蒸氣機關が必然に大資本を要求したといふこと、大資本が進歩の表象であるといふことは、全く別の問題でなければならぬ。

中小工業および新興コンツェルンにおける技術的人的缺陷は、その資本力が整備の可能性を與へなかつたのでは決してない。最近における技術の發展は、一般的にはむしろ大資本の必然性を分解し、いはゞ産業の擴散をすら可能とする方向に向つてゐるのである。

特定の——たとへば製鐵、精鍊、合成化學工業、乃至は機械組立工場などが大規模な固定資本を要求することはいふまでもあるまい。しかし他の諸工業にあつては、必ずしも巨大な資本の集中を必要としないのである。殊に工場動力として電氣モーターの出現が、工業の擴散に新しい可能性を與へたことは、マンフォードの指摘する通りである。資本主義の地盤となつた機械は、いまや資本主義に反抗しはじめ。機械はいまや小生産者の獨立を可能としはじめたのである。

然らば何が中小工業の没落を招いたか？ それこそは戰爭經濟の發展に伴ふ資本主義の没落にほかならないのである。生産は嘗つて市場の需要に依存した。市場の需要は投機的利潤に依存した。たとへばこゝに精度の低い工作機械が生産されたとせよ。その精度の低さにも拘らず、その價格が非常に低廉であるとすれば、それはたしかに資本主義的企業の需要に應じることができたのである。機械的精度の低さは、熟練工の「腕」によつて補はれるであらう。熟練工に支拂はれるべき高質銀と、機械磨損率の高さは、機械購入費の低廉さによつて償はれる。必要なものは技

術的能率であるよりは、資本的效率であつたのだ。わが國の中小工業は、このやうな資本主義的市場に依存して成長した。いはゆるコンツェルンといへどもその範疇を脱してゐなかつたのみならず、いはゆる既成財関係諸企業もその意味においてはみるべき成果を持つてはゐなかつたのである。

生産手段の海外からの輸入が逼迫するや、このやうな事情は急變した。一方には事變遂行による労働人口の不足があり、他方には高度の精密性を要求される巨大な軍需品の需要がある。軍需資材的は資本効率の概念をまったく否定し、ひたすらに技術的能率を要求する。この要求を不充分な労働人員、したがつてまた非熟練労働によつて充すためには生産の技術的體系は必然に變革されねばならない。國民經濟に巨大な比重を占める「軍需産業」におけるこの變革は「非軍需」産業にも循環的に波及せざるを得ない。これがわが國産業に課せられた課題であり、資本編成替の實質的内容である。既成財関係蓄積資本の動員によつてやうやくこの技術的變革の打撃を喰ひ止め、新しい可能性を掴まうとしてゐる。蓄積資本を持たなかつた中小工業と新興コンツェルンが過渡的な混亂に直面しつゝあるのである。

資本力の問題はむしろ副次的な問題でしかない。何がなされるべきか！ 新らしい技術體系の

國家的確立のみが、一切の事態を收拾し得るであらう。新しい技術體系とはアメリカ的大工業、アメリカ的大量生産の移植であつてはならない。むしろ市場主義的生産のなかに忘れ去られようとしてゐた日本の技術精神——もしアメリカのそれを機械的技術とするならば人間的技術の再發見が緊急の課題である。こゝに人間的技術と呼ぶものは竹細工や漆工品にみられる手先の技術の謂ではなく、機械の下僕たるアメリカ的人間に對置すべき人間解放の概念でなければならぬ。機械を驅使し、技術をわが物とし、創造と進歩に限りない喜びを感じる人間の生成。それが日本の針路を決定する。

人々はハツキリと知らねばならぬ。このやうな人間こそが、この激動期に處して自らを救ひ、國家を救ひ得るのである。自ら何ひとつ創造したこともなく、イギリスやアメリカのあてがひ扶持で、彼等の市場の番人をつとめてゐた人間だけが、英米の對日敵性に深刻な不安を抱くのだ。資本そのものは、もはや何ものをも救ひ得ない。理研コンツェルンの場合にしてみても彼等が自負した理研財團の研究そのもの、貧弱さと、英米的科學主義嚴密な再吟味を加へる必要があるのである。

かくて技術が「資本」の手を離れ、國家的要請の下にとりあげられるにいたるや、技術は小生

者の剝絶ではなくして、小生産者の再起の武器となりはじめるであらう。なぜならば新らしき技術は、資本と機械の下僕たることから人間を解放するものでなければならず、眞正の技術的合理主義とは、生きた、獨立した人間とメカニズムとの統一・再編成であるからである。獨占の祖國ドイツで森川覺三氏が發見された事實を想ひ起すがいい。使用職工五百人にすぎないロライフレックス工場は、使用職工二萬人を超えるカール・ツァイス工場に比して、技術的低位にあるとは決していへなかつたのである。新しい國家が要求するものは、日傭人足的智能しか持たない低調な人間商品の氾濫ではない。獨立生産者たる農民が國家興隆の觀念的貯水池であつたとすれば、獨立生産者たる中小工業者の育成が今日以後の國家の運命の一翼を擔ふべきことはいふまでもない。必要な技術の培養は國家の任務となるであらう。めいめいが、その私生活の維持のために乏しい頭腦をバラ／＼に酷使するのではなくて、渾然たる一體として最高の目的を實現するために、國家はその最高の智腦を國民に與へねばならないのである。

企業合同を決定するもの

かくしてもしそれが必要である場合に、企業合同の方式と方向を決定するものは、もはや明ら

かである。ドイツの技術的水準の高さが喧傳されるや、俄かに技術への關心が昂まつてきたのはわが國の名譽では決してなかつた。しかし滔々たる世界資本主義の渦中にあつて、資本第一、市場第一の經營的操作に背を向けて、優秀なるもの、最後の勝利を確信してもつばら技術第一主義で邁進したドイツ産業界の確固たる信念を吟味することはいままからでも遅くはないかも知れない。産業の唯一の擔ひ手は技術であることをしつかり胸に入れた上で、企業合同を考へるのでなければならぬのである。

企業合同が市場的操作の手段であり、市場操作を通じての企業利潤確保の手段である限り、問題は一步も前進しないのみか、却つてその「合理化」過程を通じて、國家總資本における効率の低下を惹き起すであらう。なぜならばかゝるものとしての企業合同は、何人かの損失における何人かの利得を意味する合理化にすぎず、國家總資本としては資本價值の切り下げ以外の何ものをも意味しないからである。眞實の意味の合理化は、資本價值の切り下げではなく、資本價值の上昇を、換言すれば資本の利用價值の増大を意味するものでなければならぬ。そのとき技術的合理化は一切の市場的資本的合理化に先立つものでなければならぬこと明白である。技術者の社會的地位の向上もまた、經濟における市場主義、資本主義(資本の個別的利害の優位)の克服の上に

のみ期待し得られるのである。技術者の技術的要求によつて企業合同の方式が決定されること。それが来るべき姿でなければならぬ。特に當面輸入資材の緊迫によつて、既存設備の最大限の活用が要求される時、益々問題は切實でなければならぬのである。

—十六年二月稿—

Ⅰ
ア
メ
リ
カ
の
解
體

罷業アメリカを蔽ふ

七十億弗の大豫算を樞軸とする對英武器貸與法案は昭和十六年三月十一日ルーズヴェルト大統領の署名を経て即日實施をみた。アメリカはかくて名實共に今次世界大戰に参加するにいたつたのである。恰もアメリカ政府の積極的の進展に伴ひ、かゝる好戰的對外態度への抗議として發生しつゝあつた罷業は、武器貸與法案の促進に比例して急速に悪化の一路を辿り、三月十二日のニューヨークの電報は、C・I・O會長フィリップス・マレーがU・S・スチール社系十四個の傍系會社に對し「委員會（鐵鋼労働者組織委員會）は、總員二十六萬一千名の労働契約につき、新規契約締結交渉開始を要望する」と通告せる旨を報じてゐる。次いで同月十八日のドウ・ジョーンズ通信ロサンゼルス電報は、航空機工場への罷業擴大を報じていふ。

ハーヴェイル・エアクラフト・ダイ・キャスティング會社（カリフォルニア州）の罷業は、勃發以後發既に五日を経過したが、なほ解決の曙光も見えず、形勢は益々重大化してゐる。かくて製品品の引渡が遅れることは勿論、生産計畫が豫定よりも遙かに遅延するであらうことは、確實となつた——と。

ハーヴェイル社は、航空機部分品製造の重要工場であり、ノースロップ、ダグラス、北米航空等の諸工場は、多量の部分品をハーヴェイル社に供給を仰いでゐるのである。アメリカ国防生産管理局の航空機部門委員たるスリルメークスは、十八日下院司法委員会の席上左のごとく悲觀的見解を披瀝した。

「カリフォルニアの罷業は、航空機生産計画の大部分を停頓せしめるであらう。しかしてその結果、生産管理局は、その航空機生産計画の削減修正を餘儀なくされやう」と。

三月二十五日のニューヨーク電報。

◆ベスレーム製鋼 罷業人員一百八十、聯邦争議調停官、工場代表者およびC・I・O代表者間に本日第一回協議が行はれ、C・I・O側より四ヶ條の要求を提出したといはれるが、成行きなほ不明である。

◆インターナショナル・ハーヴェスター社 罷業團ピケットと工場護衛の警官との間に衝突あり、罷業を指導せるC・I・Oは全シカゴの會員の總罷業をはのめかして壓力を加へてゐる。

◆フォード自動車會社 リンカーン工場の材料供給元たるミッドランド・スチール會社の罷業は依然解決をみず、ために工場を一時閉鎖し、茲十日間に鋼鐵罷業の解決をみない時は、ミシ

ガン會社の同社工場は、全滅の恐れありといはれる。

なほその他にデトロイトのフォード工場では、二十五日前後二回にわたり、各一時間の作業の中断が行はれ、またサンフランシスコでは、A・F・Lの指導のもとに造船所の従業員が争議を起してをり、罷業勃發の形勢濃厚である。

四月四日、デトロイト電報は、つひにフォード工場の全機能の停止を傳へた。——擴大の一途を辿りつゝある米國軍需工業界の罷業は、つひに全米各地のフォード自動車製作並に組立兩部門三十四工場一齊に閉鎖の餘儀なきに至つた——と。

フォード社は右工場閉鎖の公表に當つていふ——フォード會社が過去四十年來一回たりとも罷業の起きなかつたことを誇りとしてゐたりヴァー・ルージュ本工場にはじめて罷業が勃發し、これがために部分品の不足を招來、全米工場閉鎖のやむなきに至つた——と。しかしてこの工場閉鎖の結果、フォード會社のみで十一萬八千名の労働者が閉め出しを喰つたのである。

さらに四月五日、ニューヨーク電報—ピッツバーグUSスチール會社においてもCIOと會社側との交渉は五日に至り決裂状態に陥り、アメリカ最大の鐵鋼業の罷業が豫想されるに至つた。CIOの要求は、賃銀値上げ、有給休暇、CIO系組合員以外の労働者雇入拒絶の三ヶ條である

が會社側は政府國防計畫施行を後楯とし、きはめて非妥協的態度を示してゐるので、CIO側は既にピケティンクを開始した。もしピッツバーグ工場が罷業に入ればペンシルヴァニア、オハイオ、インディアナ、アイオワ四州のCIO労働者二十五萬は總罷業に至るべく、事態はきはめて重大であるがクヌードセン生産管理局長官は、五日夜、現在のアメリカ産業の罷業中の九割まで弾壓すべきものであると強硬意見を述べCIO側を激怒させてゐると。

技術的合理主義

周知のごとく今日のアメリカは民主主義の旗の下に世界の軍需工場化せんとしてあり、イギリスの對獨抗戦力のごときも一にかゝつてアメリカの經濟力の強弱に依存せんとする折から、ひとしく新秩序建設の名においてドイツと盟約を結ぶわが國にとつて、アメリカの諸情勢は決してこれを對岸の火災視することを許さぬものがあること勿論である。かくていまや津波のごとく全アメリカを席捲せんとする罷業の奔流は、われわれにとつてもまた重大な關心の的たるを失はない。そのときわれわれは先づアメリカ的技術乃至はアメリカ的生產體系の本質的な矛盾に著目すべきであらう。

いふまでもなくアメリカ産業を貫く特徴的な性格は、その驚くべき大量生産組織の發達でありこのことあるが故に民主主義國の王者アメリカの傲岸なる自負あり、このことあるが故に非アメリカ的勢力の伸長は困難となつたのであつた。かゝる大量生産組織が、面積廣大にして、自然的生産力に富む地域のアングロ・サクソンの獨占と非アングロ・サクソン系民族の壓迫の下に可能となつたことはいましばらく措くとして、この生産組織の技術的本質は、アダム・スミスの分業の二十世的形態たるテーラー・システムを根幹とする生産手段の機械的分化にあることは注目し値する。

アダム・スミスがその「諸國民の富」においてとりあげた分業は生産工程の分割であつた。生産手段即ち生産の機械的手段それ自體は、その原始的單純さのまゝ、いまだ分割されるにいたつてゐない。アダム・スミスの分業に最大の位置を占めるものは、人間の手先労働であり、その意味で労働は、いまだしつかりと人間に結びつき、その作業の單純さにも拘らず、仕上げの巧拙は作業者自身の人間的能力に依存してゐるのである。機械の出現は當時既に從來の手工業生産の規模と能力を打ち破つて、大量生産への途を拓いてゐたが、しかもなほ全生産體系を貫くものは、人間労働への廣汎な依存であつたことが指摘され得るであらう。

試みにいまアメリカ的生產體系の典型的標本たるフォード工場の組織をみよ。ヘンリー・フォードをして今日あらしめたものは、その徹底的な分業の推進であつたがそれはアダム・スミスの形態とは著しく異つた性格をもつ。コンヴェヤー・システムと單能工作機械との思ひ切つた採用は人間労働をその肉體的諸制限—即ち熟練の程度および個人差から全く解放し、力學的次元に引き下す。アダム・スミスが引例したピン製造業にあつては、生産工程の細分化によつて、人間労働の分割が行はれたが、しかも人間労働の本質たる個人的性格乃至は獨立性はいまだ失はれてゐない。その故にこそ彼が主張した通り、分業は時間的節約のみならず、熟練度の増大と機械的發明の推進力となり得たのであつた。⁽¹⁾然るにフォード・システムにあつては、生産工程の分割によつて人間労働の分割が行はれるのみならず、生産手段そのもの、機械的細分化によつて、人間労働は全く機械的體系の一部分たる力學的要素に轉化せしめられるのである。そこにはもはや創るものゝ喜びはなく、人間的生産の誇りはなく、在るものはただ機械の連續的圓滑運動あるのみである。「世界の工場」として君臨したイギリスに代つて、アメリカが世界産業の覇權を握り得た所以のものは、かくの如き人間労働の無機物への轉化——従つてまた人間自體の無機物への轉化によつてであつた。

- (1) アダム・スミスによれば、分業の利益は、次の三種の事情に歸する。
 - (1) 仕事をする各個の者の技能手練の増進
 - (2) 一種の仕事より他種の仕事へ移るに際し普通失はれる時間の節約
 - (3) 労働者の發明による機械の應用—分業のために、各人注意力の全部は自然に極めて單純な或る一目的に向けられるやうになる。仍つて、或る特殊部門の労働を擔當する者の中誰か、自分の特殊の仕事に仕遂げるより容易輕便なる方法を見出すことは當然期待される。——最も細密に分業の行はれる製造業で使用する機械の大半は元來、各自専ら或る甚だ單純なる操作を擔當したので、自然にその思考力をこれを爲すためのより容易輕便なる方法の發見に向けた普通労働者の發明にかゝる。(竹内謙二譯、改造文庫「國富論」上卷一〇六—一一〇頁參照)
- なほスミスは、學問乃至は職業の社會的分化による利益を附言してゐる。

パーリンガムはいふ。——この工場には、労働者を監視し、時計を睨みながら作業を督勵する親方がゐない。……自動生産の親方は機械なのだ。諸君は無限コンヴェヤー・ベルトを掴まへて何かを哀願することは出きない。諸君は手を洗ひに行つたり、休憩するために持ち場を離れる許

しを受けることは出来ない。諸君がコンヴェヤー・ベルトに「人情味」を望むことはあり得ないことだ。ベルトは人情もないし、公平も不公平もない。それはたゞ仕事を運んで来て、次の人間の前へ持つてゆく。諸君がネヂを締めたか締めなかつたかにはお構ひなしである。

——監視人がよしんば奴隷使役人だとしても、彼が人間である限り諸君はその監視人に向つて何事かを訴へたり、談判をしたり、謀叛を起したり、或は悪口をいつてみたりすることが出来るだらう。——だが相手が非人情な機械だとすると、一體何が出来るのだ？——もし諸君が作業を怠つたとすると、もう言ひ逃れもやり直しも出来ない。怠業は自動的に発見される。諸君の隣にゐる作業者は仕事をする事が出来なくなる。作業の全體の流れが攪亂されてしまふ。一人が怠ければ、全體の生産がメチャクになるのだ。ほんのちよつとした罪が、一瞬の間にその倍にも擴大されてしまふ。いはゞ諸君のたつた一度の怠業そのものが、大量生産されてしまふのである——”(Roger Burlingame, "Engines of Democracy")

イギリス的アダム・スミスの分業は、まさしくアダム・スミスの豫見の通り機械の發達に貢献したが、それは同時にイギリス産業の自殺への途を敷設するものであつた。不斷に出現する新しい生産手段は舊き産業を落伍者たらしめ、イギリス國內における破産者の大量生産に貢献した

のみならず、イギリスより約百年遅れ、その故に却つてイギリスより百年新しい技術的出發點から自己を育てあげたアメリカ産業の出現によつて、全イギリスの産業が危地に追ひ込まれるにいたつたのである。今日もはや何人もイギリスを目して『世界の工場』と考へる者はゐないであらう。イギリスは自らを商業資本的性格に轉身せしめることによつて、世界商品のブローカーとなり、他方その七つの海に跨る植民地の領有によつて土地貴族的地位を保持し、さらにその金融資本的性格において、アメリカ産業資本に自己を結合することによつてやうやくその保身に成功したのである。

アメリカ的技術の自殺

もつとも早く出發したイギリス機械制工業はその機械的合理性を貫徹する前にその資本主義的矛盾によつて、世界市場から後退した。それは機械生産の發展にも拘らずなほ人間労働の廣汎な残存を整理し得なかつたイギリスの、アメリカ的機械主義への屈服であり、イギリス資本のアメリカへの移行と土地資本的性格の深化として表現されたのであつた。われわれはこゝに歴史における時間的な後進性が、却つて先進者を急速に凌駕する可能性を齎す事實を發見し、從來の『後

進國日本』論者の敗北主義的本質論を知ることが出来るのであるが、然らば眼前王者のごとく世界に君臨するアメリカ的生産體系の運命はどうであらうか。

ゾンバルトの定義するところにしたがへば、技術とは『有機的諸制限からの人間の解放』であった。即ち肉體的諸器官の能力を超えて人間活動を可能ならしめることが技術の任務なのであった。然るにアメリカ的技術なるものは、さきにみた通り人間的概念の否定的方向へ発展しつつあり、それは『有機的諸制限からの人間の解放』であると同時に、『人間の無機物への轉化』を必然ならしめる。ここでは人間は單なる機械の附屬品たるに過ぎないのである。分業の技術的合理主義は極度に發展せしめられる。しかもアダム・スミスの觀念にあつては、各工程を主宰するものはなほ人間たる労働者であつたに對し、アメリカ的分業にあつては、各工程の主宰者は機械たる生産手段であつて、人間ではない。人間が機械を使ふのか、機械が人間を使ふのかといふ素朴且つ重要な質問が、アメリカ的技術におけるほどに適切であり得る場合はないであらう。

アダム・スミスが讚美したとき分業の利益はこゝでは消滅する。アメリカ的技術は時間の節約に貢献することはあり得ても、個人的熟練の増進の問題はもはや無意味であり、發明への貢献はこれを期待することが不可能である。労働者は機械に使役される道具たるにすぎず、したがつ

て機械を理解しこれを駆使し、進歩改善への契機を掴むことは不可能となるからである。しかもこのやうなアメリカ的技術は、アダム・スミスの分業の必然的發展過程であり、その故に他方アダム・スミスの分業が労働の人間性を保持し、技術の發展に貢献し得たのは、單にその初步的段階の故であつたことは、きはめて重要な問題でなければならぬ。技術のイギリス的形態は固定資本の壓迫によつて、つひにアメリカ的形態に追隨し得ずして潰滅した。然るにそのアメリカ的形態は、固定資本の壓迫に加ふるに人間性の喪失によつて、發展の可能性を喪失しつつある。このことに著目し得ずして、かのナチス・ドイツの技術的偉業を理解すべき手がかりはなく、アメリカ的技術に迫り、これを凌駕し得べき新らしき生産體系創設への展望は持ち得ないのである。人間の機械への隷屬を以て、生産手段私有制の故に歸せんとする左翼的見解は、いまやあきらかに誤謬である。フォードのコンヴェヤー・システムは、それが私有されようと公有されようと、それには頓着なしに労働者を追ひまくり彼等を隷屬せしめるであらう。諸々の技術論者が機械の最高の形態として定義せる、機械の連続性の構想は訂正されねばならない。往復動蒸氣機關の不連続運動に對する蒸氣タービンの連続運動、手道具の不連続運動に對する旋盤の連続運動は、たしかに進歩の名に値するものであつた。だが問題は機械の連続性と技術の連続性との混同の中

にひそんで居る。即ち機械と『人間』を含む労働體系を機械的合理主義によつて編成せんとするところに、今日までの技術論者の不用意な錯誤があつたのである。

人間を労働機械とし、人間労働を労働商品として理解せんとする限り、生産を支配するものはまさしく物質的力學的論理であり、機械的合理主義であつた。そのとき、人間労働を含む全労働體系もまた物質的機械的合理主義によつて理解される。人々は機械は技術の一要素であり、技術はあらゆる意味で人間的創造物であることを忘れようとした。生産手段の所有関係とは全く別個に人間労働の無機物的規定と力學的論理が否定され、生きてゐる人間の労働の本質が確認されない限り、人間の機械への隷屬は廢止され得ない、アメリカはしかしまづしづらに人間否定への途を明け落ちて行つたのである。

人間と機械の統一

技術的合理主義、實は物質的合理主義の量的な發展としてのアメリカ産業は、つひに人間を否定することによつて自らの運命に終止符を打とうとした。そこにあるものは生きた、有機的な人間ではなくして、物質たる無機物的人間にすぎない。かくて『人間の解放』のためではなくし

て、單に生産物の配分を争ふ階級的對立のみが、アメリカ的社會の全構造を規定する。いまや熾烈なる猛威を逞しくせんとしてゐる罷業の嵐が、そのやうなアメリカ社會の矛盾の表現たることに論議の餘地はないであらう。そしてこの罷業が示すもうひとつの重要な問題は、労働大衆の福祉を齎す代りに、アメリカ的生產體系自體を破滅に導くであらうといふことである。

人々はルネ・クレールが嘗てその映畫『自由を我等に』の中に示した辛辣な場面を憶えてゐるであらう。ベルト・コンヴェヤーの傍に坐らせられた労働者は、この機械的な仕掛けの前に、全く一個の機械的部分品と化してゐる。その結果として、ただ一人の労働者でもが、部分品たる任務を忘れて、『人間』に立ち戻り彼の頭腦の獨立性を主張しようとするれば、全生産系列は忽ち混亂に陥り、『作業の流れ』は中斷され生産の系列は不可能となるのである。この徹底的な機械的合理主義の故に、一度び些細な故障が一箇所に勃發するや、全生産體系が潰滅し、有機的な救済の方法は全く不可能となるといふ事實は、ルネ・クレールが示したやうな一工場内部に起るに止まらず、全アメリカの社會的生產體系を貫いてゐる。リヴァ・ルージュ本工場の作業停止は、一瞬にして、全フォード工場を震撼する。ハーヴィル・エアクラフト・ダイ・キヤスチング會社の操業停止は、全アメリカの『航空機生産の大部分を停頓せしめる』にいたるのである。合衆國

政府は生産管理命令によつて、事態の強權的解決を圖るか、勞働賃銀の吊上げによつて一時を糊塗する以外に方法はないであらう。だがいづれの解決が選ばれるにしても、物質的對立抗争と物質矛盾の絶滅は困難である。しかもかゝる社會的諸條件の觀察の上に成立したかの唯物史觀は、その認識論的母胎たる唯物辯證法のもつ宿命的抗争の概念—即ち止まるところを知らぬ矛盾の發展によつてプロレタリアートによる人間の解放と統一の代りに、ただ西歐的社會およびその延長たるアメリカ的社會の没落を豫言するに止まるものではなかつたか。

アメリカ的合理主義はひとつの功績をもつた。即ち機械的論理の徹底的な追求による機械の進歩への貢献と、同時にまた機械的論理そのもの、明白な限界の發見である。蒸氣タービンの發明は、大規模發電の可能性を生み、電氣の普遍化は劃期的な可能性を人間に與へた。即ち往復動蒸氣機關が必然に要求した大規模企業—資本の集中代りに、僅少の資本によつて、地域的制限（蒸氣機關は石炭産地に擬着する）に捉はれずに發展し、獨立生産者を育成し得る可能性がこゝに生れたのである。然るにアメリカにおける事態は、電氣をして人間解放の技術的手段たらしめる代りに、大資本の利益に奉仕せしめ、人間勞働の撲滅に發展したのである。自動車を作り、ラヂオを作り、飛行機を作り、ミシンを作つたアメリカ人はいまや却つてその老大な機械體系の下に壓

殺されんとし、しかもその結果は機械的合理主義そのものをすら推進し得る能力を喪失せんとしてゐるのである。

然らば新らしき技術體系とは何か。國家と社會の歴史と傳統を擔ひ、その故に生きた一個の人間としての自覺と獨立性を持つ人間がその理想を實現し、その抱負を現實化せんがための要具としての技術體系にはかならぬ。

眞實の合理主義とは物質的論理への還元ではなくて、人間の歴史と社會への深い理解の追求であり、したがつて技術とはゾンバルトのいふごとく『有機的な諸制限からの人間の解放』であると同時に實は『人間』そのもの、探求でなければならぬ。今日航空技術が當面する最大の問題は機械的論理の追求よりはむしろ操縦者たる人間の能力と機械との調和にあることを思へ。戦闘機のスピード増加は、旋回時における加速度と人間の肉體的能力との相剋によつて微妙な諸制限に到達しつゝある。英空軍の誇る新鋭機スピットファイアーは、その極度の高速の故に空中遭遇戦に際して必要な小半旋回を行ひ得ず、流星のごとく戦闘圏外へとび出してしまふ。成層圏飛行が當面する諸困難もまた人間的能力の制限の故にである。これらのことは、人間の肉體と機械との相剋を物語つてゐるにすぎないかも知れない。だがその肉體的諸條件すら考慮することなし

に發展してきた西歐的近代技術なるものが、その機械的合理主義の枠の中で、これ以上に自己を發展せしめると考へることが出来るであらうか？ まして國家の運命を擔ふ國民的自覺を無視せる合理主義が、何をもつてわれわれに貢獻し得ようか？

アメリカにおける罷業が、勞働條件の物質的引き上げの要求と同時に、反戰的要因を濃厚に持つとしても何の不思議もない。祖國と歴史を持たない物質的人間の眼の前には、戰爭の困難を克服せんとする建設的意志の昂揚はあり得ないからである。いまや敵を明視し、その戦ひの意義に透徹せる日本人こそが、新らしき技術的秩序の創建者たり得るであらう。アメリカ的機械の遺産は日本人のものであり、そしてまたアメリカ的機械の止揚者たるものは日本人でなければならぬ。かゝる日本人の發見においてのみ日本はアメリカを追ひ越し得るであらう。ひとつの物質力たるにすぎない資本の論理が、國家の論理によつて置きかへられ、「勞働商品」が國家的勞働の自覺と義務に立ち歸つたとき、はじめて新らしい技術體系が見出されるであらう。

—十六年四月稿—

■ 技術史と軍事技術

軍事技術の相對性

長い世界史のおのおの、段階における運動の基本法則は、その時代の技術の發展とその内部關係、軍事技術と工業技術との相互關係、さらに軍事技術内部における個々の要素間の關係等をすべて究極において決定し左右する。したがつてわれわれはかうした種々の歴史上の條件を無視して、單純に技術のみの發展法則といったものをうちたてるわけにはゆかない。抽象的な技術の法則を性急に追ひかけるのではなく、その複雑な多面性のあらゆる側面に光をあてつゝ、特定の時代、特定の國家に固有な技術發達のみちゆきを追跡するところにこそ、技術史の眞の任務があるであらう。——「序論」一一—一二頁

これが小山氏「近代軍事技術史」をつらぬいてゐる基本的な構造である。これを別の言葉でいへば、軍事技術史の發展過程を通して生産技術一般の、さらには歴史一般の運動法則に到達しようとするところに、この書物の特異な性格があるといへるであらう。そして「その複雑な多面性のあらゆる側面に光をあてつゝ、特定の時代、特定の國家に固有な技術發達のみちゆきを追跡しようといふ著者の試みは、可成りの程度に成功してゐるといへる。

では『近代軍事技術史』は、その克明なデータの整理を通して、どういふ結論に達することができたか？ まづ『近代軍事技術史』が、具體的にはどんな目標を持つてゐたかを検討してみよう。小山氏が展開された見解は、一言にしていへば、技術の歴史的な發展過程における、軍事技術の相對性であつた。この原則論を提起するにあつては、小山氏は、甚だ慎重である。即ち「あらゆる技術の發達は時間と空間とをはなれて實現されるものではなく、つねに種々の複雑な歴史的條件のもとにおこなはれる。したがつてその歴史的發展の内部における軍事技術と一般工業技術との相互關係もまた、かゝる基礎條件を無視してそれぞれの内部的特殊性からのみ追求するわけにはゆかない。兩者の相互關係は時代と社會とがことなるにしたがつて變化してゆく。たとへば……歴史的にたもつて、急激に國內産業の編成替をおこなつた國家では、その産業的構成において軍事工業が大きな比重をしめるといふ共通の現象をしめてゐる。それら國では技術的經濟的におかれてゐればるほど、重工業や化學工業などの發達が貧弱でありそのかはり軍事工業が壓倒的に大きな地位をしめてゐるのである。」また——「國家間の利害の對立がはげしくなり、軍事行動の可能性がたかまるにつれて、政治上の要求は軍事生産技術の促進と強化とをもたらしあまたの非軍事的技術を一時的に従屬させ、または奉仕させる。」

だが小山氏にしたがへば、このやうな事態は、一つの變則的なものにすぎない。單に「複雑な歴史的條件のもとにおこなはれる」技術の發達を、現象的に追ひかけまわしてゐるだけでは、われわれはただ現象の多様に眼が眩んでしまふだけであらう。小山氏は、本書の執筆の動機となつた「一般産業においてしめる軍事生産技術の地位と役割に關する論争」に答へねばならない。こゝで技術自體の「内部的特殊性」が問題となつてくるのである。

軍事技術の發展法則

「時代の技術の體系が歴史的・社會的事情の支配をうけると同時にまた、それ自身の内部に獨自の相互關係と發展法則とをもつてゐるといふ點がわすれられてはならない。……生産手段と消費資料の二部門にぞくする諸技術が互に相互依存的な連環關係といつたものは、……一部門の技術的進歩が他の部門のそれにおよぼす作用は、つねに一種の有機的な波動を起して復歸し、かくて全體として無限の相互作用と向上線とをたどつてゆく内的必然性をふくんでゐる……」(一一七頁)

ところで軍事生産技術なるものは、「複雑な體系をあんである社會的生產技術の一分肢であり、

一構成要素である以上、後者の上におこる變化や進歩が同時に前者の變化や進歩をも左右することとはなんら不思議ではない。すなはち一般の生産技術の進歩發達が、あたらしい兵器生産の方法にみちをひらき、それが兵器構造上のあたらしい飛躍をみちびくのである。」(一〇頁)然るに「一般生産技術を母胎としてその上に助長し發展してゆく軍事生産技術なるものは、つねに特殊な兵器のかたちにおいて結實し、たゞその特殊な目的だけのために無限に消費されてゆく性格をもつてゐる。」生産手段と消費資料の二部門の技術の相互作用のごとき關係は、軍事技術と他の技術部門との間には、成立しない。軍事技術にあつては、「さうした技術的進歩は單なる局部的ないし一方的な波動にのみ終る運命をもつてゐる。軍事生産技術が技術として有するかうした限界性はたとへばそれが諸多の技術部門からきりはなされ、孤立的または獨占的に發展させられるとき、往々社會の生産技術全體の均衡の喪失、その衰弱化をひきおこす原因となるのである。」(一一七頁)では、一般生産技術を母胎とし、そのひとつの分岐たるにすぎない軍事技術の立場は、常に受動的であり、相對的なものであらうか？

「しかし他方でまた、軍事生産技術はそれが獨自の技術的特性をもつてゐるかぎり、つねに工業技術に絕對的に依存し、ただ一方的にのみ規定され支配されるとはかざられてゐない。……

軍事生産品と非軍事生産品とのあひだには、その技術的性質の上で本質的な相違があり、兩者ともそれぞれ自己の構造に適應した生産行程の獨特な内容をもつてゐるのである。かゝる軍事生産技術の特性こそ、そのながい歴史的發展の過程において單に工業技術から一方的に左右されるだけでなく、他方で逆に經濟的發展の内部にあつて自己の要求を提出し、自己に必要な技術的根據を準備し保證するべく一般産業技術の發達をうながしてきた有力な内的理由となつてゐるのである。かゝる技術的特性が一定の政治的要求など、むすびつくと、軍事生産技術は一般産業の發達の動因となり、あるひは諸多の技術部門の先頭にたつてすゝむといふ結果が生じてくる。」(一〇頁)

と。しかもこの場合にも小山氏は、「軍事生産技術が一般生産技術の全體におよぼす影響や作用は相對的なものであつて、歴史的發展における決定的役割はつねに後者がにぎつてゐるといふことは無視されてはならない」ことを附言するのを忘れないのである。

日本軍事技術の性格

かくて小山氏のいはんとするところは、ほぼ明瞭であると思はれる。即ち「長い世界史のおの

をこの段階における運動の基本法則は、その時代の技術の発展とその内部関係、軍事技術と工業技術との相互関係、さらに軍事技術内部における個々の要素間の関係等をすべて究極において決定し左右する」ことを認めつゝ、また「軍事組織そのものがつねに政治勢力の有力な支柱のひとつであつたかぎり、軍事生産技術は他の一般生産技術にさきんじて發達させられるといふ潜在的性質をそなへてゐる」(一一頁)ことを認めつゝ、「軍事生産技術そのものが社會の廣汎な技術體系中のひとつの分岐であるかぎり、社會的技術の全面的な關係からみてそれは機能的に一種の限界をもたざるをえない」(一一七頁)こと、したがつてまた「一般に軍事生産技術の發達がもつばら孤立してひとりでおこなはれる自己運動のものではなく、それが一般の社會の生産技術、とくに工業技術の進歩に依存し、それと密接に關係してゐるといふこと」を主張しようとするのが「近代軍事技術史」の目標であり、結論なのであつた。

これは甚だ妥當な解答のやうである。特に「マニユファクチュアの技術の範圍内で最も進歩した生産装置をもち、一番はやくある程度的大量生産組織を實現させてゐた軍事技術の體系が、(鑛山における初期蒸氣機關の發明などをふくめて)、なぜ産業革命の技術的出發點となることができず、纖維産業における作業機の發明や改良のごときが原則的にその出發點となつたのかといふ

非常に重要な問題にたいしても「満足すべき解答を提出してゐるやうにみる。だが私は、小山氏が極めて用心深く特定の條件の下においては、軍事技術が先導的役割を演ずることを認め、且つこれを強調してゐるにも拘らず、この解答に不満を抱かざるを得ない。

「一般産業技術においてしめる軍事生産技術の地位と役割に關する論争」が、活潑に展開されるにいたつたのは、明治維新以來、一般産業技術發展の低位の上に構築された、わが軍事生産機構が、支那事變以後、世界戦争の展開過程にあつて、いかにして我が軍事需要を充足するかといふ現實的な問題の解決を重要な契機とするものであつた。しかし軍事生産機構が、一般産業の發展水準に依存し、これに制約されることを強調したものは、滿洲事變後の軍擴時代に出現したいはゆる「日本資本主義」に關する諸論策であつたことは、なほ人々の記憶に残つてゐるところであらうと思ふ。そこでは日本軍事機構の先導性は、日本の後進性と軍事機構の脆弱性との指標として、主張されてゐた。然らば、ひとしく軍事技術の限界を主張される小山氏とそれらの論策との間には、日本軍事技術の觀察に當つて、どのやうな相違があるであらうか?

小山氏は、日本における技術發展の過程が、イギリス的定型とは反對に、軍事技術の發展によつて先行されてゐたことを認めつゝ、「しかしこのことは、新生日本がおなじやうに出發にたちお

くれた印度や支那のごとき運命からまぬがれ、先進列強に對抗して自己の獨立と自立とを確保しようとする努力したこと、必然の結果にはかならなかつたといへる」(一三三頁)とし、また軍事生産機構の官營形式については、「日本においては、最初から兵器生産が官營形式により政府の厳重な統制の下におかれ、一般の資本制的發展の餘地すくなく、それに外國よりの兵器の購入も政府が直接おこなつたから、かうした資本の國際化からくる悪影響はほとんどうけなかつたといつてよい。第一次大戰のみぎり、ドイツの兵隊が自國産マグネットをエンジンにそなへたフランス爆撃機に攻撃され、またフランス國民が自國産ボーキサイトをつくられたツエツペリン飛行船で空襲されるといつた事態は、わが光輝ある日本の軍隊ならびに國民のかつて経験しなかつたところであり、おそらく將來も永久に経験しないであらう」(一八九頁)として、軍事技術の先行的發展と、官營形式の、日本における進歩的役割を強調されてゐる。

方法論の顛倒

だが、産業技術の一般的な發展から切り離された日本軍事技術の運命について、小山氏は從來の悲觀的な見透に對する新らしい見解を示すまでにはいたつてゐない。官營形式による軍事技術

の先行的な發達が、「印度や支那のごとき運命」から日本を守り、國際資本から國家を守つたといふだけでは、そこにいかなる發展の可能性(若くは限界)が與へられてゐるかといふことは、いまだ不明のままに残されてゐる。むしろ「軍事生産技術が技術として有するかうした限界性はたとへばそれが諸多の技術部門からきりはなされ、孤立的または獨占的に發展させられるとき、往々社會の生産技術全體の均衡の喪失、その衰弱化をひきおこす原因となるのである」(一一七頁)といふ小山氏の提言は、依然として決定的な意味をもつてゐる。「近代軍事技術史」の全構造そのものも、一般産業技術から次第に離れてゆき、「顛倒化されて行つて、つひには頭でたつやうになつてしまつた」軍事技術の歴史として構成されてゐるのである。

ところで、一定の制限を内包してゐるものは、ひとり軍事技術のみではない。小山氏も認められてゐる通り、一般産業技術といへども、歴史的・社會的事情の制約を受けるのである。一般産業技術の「生産手段と消費資料の二部門にぞくする諸技術が互に相互依存的な連環關係」が「無限の相互作用と向上線とをたどつてゆく内的必然性」は、「全體として、みた場合にのみ認められ「特定の時代、特定の國家に固有な」技術體系は、ひとり軍事技術といはず、一般産業技術もまた隆替の運命を免れ得なかつたことは、『近代軍事技術史』自らが示すところであつた。ベッセマ

一法の出現以後、イギリス製鐵業が世界的水準から逆行しはじめ、代つて舊い技術的傳統を缺如してゐたドイツやアメリカが登場するにいたつたことは、その一つの適例である。「特定の時代、特定の國家に固有な」軍事技術の隆替は、それが一般産業技術の發展と結びついてゐたか否かではなく、その軍事技術を支へてゐる社會的勢力そのもの、進歩的性格に由來するものであつたこともまた、『近代軍事技術史』が、物語るところであつた。

かくてわれわれは小山氏と同じデータから、異つた結論を抜き出すことができる。軍事技術は一般産業技術の分岐ではなく、社會的な生産技術一般の分岐として、一般産業技術と軍事技術が、併列的・相互依存的な序列と關係に立つ。さらに大膽にいへば、一般産業技術から軍事技術を區別するものは、生産物そのもの、機能であつて、生産技術そのもの、本質的な構造なのではない。たとへばここに、「一般産業技術」の振興を圖ることによつて、今日の日本の軍事生産の問題に、基本的な解決を與へることができると考へるならば、誤りこれにすぎるものはないであらう。年産五萬臺の戰車をつくらうとすることが、軍事技術發展のもつとも本格的な、もつとも根本的な對策であるといつた風な、率直明快な表現が失はれて、アメリカの工作機械工業やドイツの化學工業の噂話が、日本の「一般産業技術」の低位と共に語られつゝあるのは、技術の

發展形態の把握の仕方そのものに、根本的な誤謬が横はつてゐることに起因するといふべきである。

小山氏の『近代軍事技術史』は、まじめな努力の成果と齎されたものであるが、この努力を以て、なほ我々の前途に新しい希望の火を點じることができなすれば、それが「歐米の事實が主要テーマとなつてゐる」からではなく、方法論そのものに、重大な問題が含まれてゐるためであるといふほかはない。その意味で、著者が『日本近代軍事技術史』をまとめられる意志があるのを知り、その日を待ちたい。本書においてはむしろ行間に没してゐた重要な問題が、そこでは正面からとりくまれるであらうからである。

V
日本科學の形成

「文藝春秋」の昭和十六年五月號を披いて頂きたい。企畫院次長、工學博士宮本武之輔氏は「日本科學存立の論證」といふ一文を發表されてゐる。氏は人も知る斯界の一權威であり、その所説は今日行はれてゐる科學論乃至は技術論の有力なる見解を代表してゐると思はれる。特に氏の所論が「日本科學」の問題に正面から觸れようとしてゐる機會に、科學論における日本的偶像の正體をあきらかにしてみたいと考へる。

日本科學は成立するか

先づ「日本科學」に對する宮本氏の原則的な見解をとりあげてみる。

一、日本科學は成立するか？ — そもそも謂ふところの日本科學とは果して何であるか。それが歐米諸國から輸入傳授されたものでなく、日本民族の研究と努力によつて大成された科學を意味するかぎり、そこには殆どなんらの問題も起り得ない。その意味における日本科學の育成こそは、わが國科學振興の最も大きな目標のひとつを構成することに、異論を挟む餘地はないからである——と。

宮本氏の命題(1) 日本科學とは日本民族によつて大成された科學である。

だが宮本氏はいふ。

「たゞし日本科學が、恰もわが國體が萬邦無比の、特殊性格を持つた勝れた國體であるのと同様な、特殊の性格を具備すべきことを要請するものとするれば、そこに初めて問題が生ずる。もし科學概念の内包を限定して純正科學だけをその對象とするならば、日本科學なるものは、絶對に存立し得ない。」

例へば航空機の基礎理論のひとつを構成する氣體力學の法則はわが國において成立すると同時に、獨逸や米國においても齊しく成立するのである。わが國の航空機と、獨逸や米國のそれらとが、相異なる氣體力學によつて理論づけられる譯では斷じてないのだ。そこに科學の普遍妥當性がある……と。

つまり應用科學はその「立地性國家性乃至民族性に根據を置いて」日本の特殊性を持ち得るが純正科學なるものは、その『普遍妥當性に立脚して』このやうな特殊性が否定されねばならぬといふわけだ。宮本氏は嘆いていふ

しかるにわが學界の一部に、純正科學の分野においてすら、特殊性格の日本科學創建論が行はれることを私は心から苦々しく思ふ」と

宮本氏の命題(2) 日本純正科學はその特殊性を主張し得い。特殊性格を持つ日本科學は應用科學にのみ限定さるべきである。

これは甚だ奇妙なる論法である。先づ日本科學は日本人の手によつて大成された科學を指すとす。いふ最初の命題は恐らく何も問題はないところであらう。だがもつとも重要なことは、宮本氏の頭にコピリついてゐる『普通妥當性』と『純正科學』の概念の検討である。いふまでもなくこの考へ方の基礎をなすものは、『科學に國境なし』といふ舊態依然たる認識であり、宮本氏は『純正科學』と『應用科學』を區別することによつて、後者に限つてこの舊臭い認識を修正しようとして試みてゐるにはかならないからである。

純正科學と應用科學

宮本氏のいはゆる『純正科學』と『應用科學』といふのは一體どのやうな概念なのであらうか。科學といふ包括概念の中には純正科學と應用科學との、二つの限定概念を區別することが出来る。應用科學と技術とは、これを同義概念として取扱ひ得るのが、少くとも今日の常識と考へられる。この意味において狹義には科學と技術と對立せしめることもできるし、廣義には科

學の中に技術を包括せしめることができる」と。

ところで宮本氏によれば、技術が科學の應用部門だといふのは、技術が科學から派生的に發展したといふ意味ではなく、この二つは本質的に相異なる別個の概念である。即ち

——純正科學の範疇において、最も古くから發達した學術は、天文學、數學、歴史などであるが、技術はそれらの應用部門として發達する以前の、太古蒙昧の原始生活時代から、衣食住に關する要求を充たすために、必然的に存在しなければならなかつた筈だからである。そして

——これを發生論的に見るも、科學は自然現象を支配する理論の究明を目的とするが故にその對象とするところのものが客觀的の自然に限定せられるのに對して、技術は自然法則を人類生活の中に具象せしめて、これが向上發展を圖ることを目的とするが故に、その對象とするところのものが、客觀的の自然に局限せられるのを原則とする——科學の特性が法則にあり、發見にあるのに對し、技術の特性が成形にあり、綜合にあり、發明にありと謂はれる所以である。そしてそこにまた科學を伴はない技術の存在し得る理由がある。

これは甚だおかしい。『科學と技術とは發生論的に相違し、また本質論的に相異なる別個の概念』

だとすると、この兩者を含む『科學といふ包括概念』はどのやうにして成立するのだらう？

宮本氏はいふ。——（この）兩者の間に極めて緊密な依存關係の成立することを、否定することはできない。——特に近世において兩者の關係はその緊密性を加速度的に増大しつゝある。……かくして今日の高度の發展段階においては、科學と技術との間に、明確な限界を設けることすら不可解なくらゐるにまで兩者の間には強じんなる紐帶が結ばれるに到つた——と

何だか要領を得ない。さらに宮本氏の論理を辿つて見やう。

——科學者或は理學者の一部に、法則や發見だけが貴重なる學術であつて、成形や發明は寧ろ學術の圏外にあつて純正科學が進歩しさへすれば、これが應用を目的とする技術などは、職工にでも任せて置けば自然發生的に發生を遂げるかの如き説をなすものがあるのは、確かに謬見の甚しきものだ——と。

包括概念としての『科學』の本體は依然不明である。良く検討してみると宮本氏は最初に『科學』といふ概念を機械的に『純正科學』と『應用科學』とに區別したやうに包括概念としての科學』はこの二つの特殊概念の算術的總和と考へられるらしい。何故ならば、宮本氏は『純正科學』と『應用科學』とのそれ／＼について、『日本科學』としての成否を検討されてはゐるが、これら

二つのもの、総合としての包括的な『科學』が『日本科學』として成立し得るかどうかについては一向に問題とされないからである。―科學概念の内容を包括して、ひとり純正科學ばかりでなく、應用科學まで包含してその目標とするならば、その後者については日本科學なるものが、立派に存在し得る―といふ妙ちくりんな提言が、とび出してくる所以である。

科學論に非ざる科學論

宮本氏の日本科學論に對する批判は、實はこれでおしまひである。廣義の『科學』と狹義の科學といふ概念を持ち出して來ながら、前者について『日本科學』成立の當否を論じやうとされないのではテンデ科學論たるの資格すらないからである。

しかしかういつてしまつたのでは、宮本氏の折角の勞作をバカにするといふことにもならうしそれでは斯界の權威者に對する禮を失するのみならず、肝心の『日本科學』の問題が手もつかずに残されることになる。筆者はさらにペンを進めることにしよう。

宮本氏は應用科學については、『日本科學』なるものが存立し得るといはれる。だがそれはどのやうな意味において存立し得るのであらうか？

―應用科學は、純正科學によつて究明された理論や法則を、人類生活の向上發展のために利用することを目的とする學術であつてみれば、おのおの、國土における資源や環境、即ち各種の自然的條件乃至人爲的條件の異なるに従つて、それに適合する科學の應用形式は、おのづから異ならざるを得ない。これ私が應用科學としての技術の立地性を肯定し、その國家と民族性とを強調する所以である―と。

これを要するに『應用科學』における日本の性格は、宮本氏によればその『應用形式』の面にあるに過ぎぬ。しかしそんなものならば、本質的な意味で『日本科學』でも何でもありはしないではないか？ 刺身を喰ひ、着物を着て、疊の上に住んでも、イギリス人はやつぱりイギリス人に相違ない。たとへば『普遍妥當』的な『純正科學』が、木造耐火家屋の研究に用ひられると、忽ち『日本科學』になる。人造石油の研究は『日本的』だが、どこの國にも必要な成層圏飛行機の研究は『日本的』でないとするに、『日本科學』としての價値の普遍妥當性と『日本的』なものとしての特殊性は、どこで調和されるであらうか？

かくして宮本氏の科學論は純正『日本藝術』の否定につながることになる。宮本氏にしたがへば恐らく特殊の國家的要請に基く政治的藝術のみが『日本藝術』だといふことになるであらう。

だが法隆寺は日本人が作り、木造であるが故に『日本藝術』なのではない。源氏物語は紫式部が作ったから『日本藝術』なのではない。まさしく西歐的なものとの本質的な対立性において『日本藝術』なのである。しかも法隆寺にしても、源氏物語にしても、世界第一流藝術作品として、その普遍的な価値を主張し得るのである。

ひとつ宮本氏に訊いてみよう。科学が普遍妥當性を持つやうに、藝術もまた普遍妥當性を持つ我々が価値ありと考へる藝術は、ルーブル博物館に運び込まれても依然その価値を主張することができるであらう。すると宮本流の考へ方にしがへば『純正藝術』は『日本藝術』とはなり得ない。だが日本人だけにしかわからないやうな藝術だけが『日本藝術』であり得るのだとするならば、そのものくらゐつまらないものは何處にもないではないか。

科学の特殊性と普遍性

あるひはまた宮本氏はいはれる——日本科学が、恰もわが國體が萬邦無比の、特殊性格を持つ勝れた國體であるのと同様な、特殊の性格を具備すべきことを要請するものとすれば、そこに初めて問題が生ずる——と。然らば宮本氏に訊ねたい。一體八紘一字とはどういふことなのだ。我が

國體は萬邦無比の特殊性格を持つと同時に、世界政治の指導的原理としての客觀性を持つてゐるのである。

日本は世界の指導國家とならねばならぬ。それは西歐的國家觀の否定としての日本の特殊性の確認であると同時に、他面日本の原理による世界の統一なのだ。

特殊性と普遍性の統一、それが科学の本質である。あらゆる科学は、その歴史的段階においては、既成科学の普遍性に對する特殊性として成立する。平田内藏吉氏はその著『科学の始め』においてギリシヤ科学の發展と崩壞について簡明な叙述を與へてゐられる。⁽¹⁾

—かれらは無限に延長した直線を考へなかつた。直線はつねに二つの點によつて限定された。それは完成され完了した體系であつた。その典型の否定によつてのみ新しい科学の分野が開かれた——と。

また

—ギリシヤ科学における有限性が明瞭に認識せられるときに、はじめて、近代数学における無限の概念は明瞭になつてくる。ギリシヤ的有限の否定的發展において、無限の数学として集合論の意味が解し得る——と。

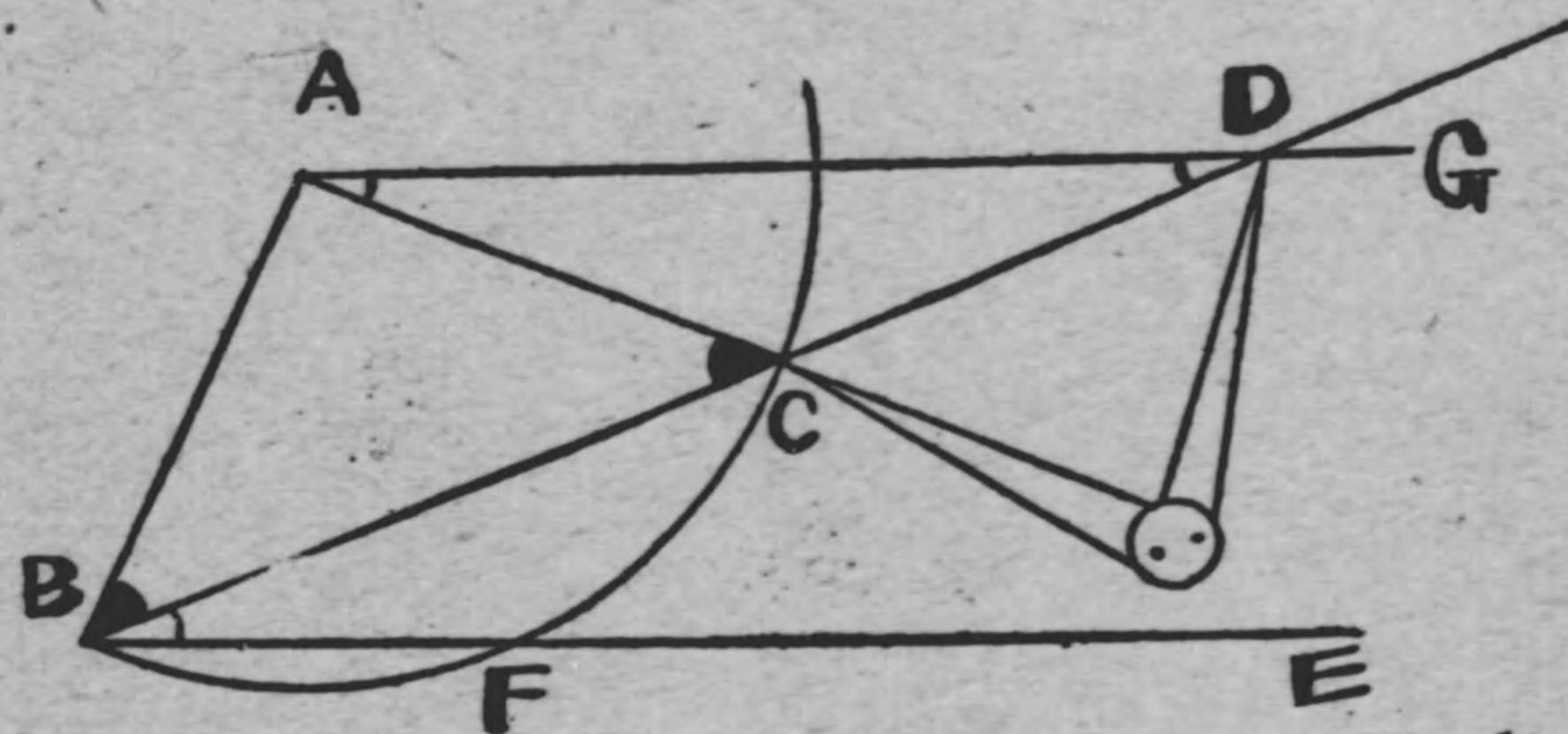
宮本氏の採用された方法を以てしては、このやうな近代科學によるギリシヤ科學の否定は理解し得ないところであらう。まして日本科學による西歐的近代科學の否定においてをや。宮本氏は氣體力學の『法則』と、氣體力學をもその一部門とする全科學體系との學問的な區別がわからない。だから前述したやうに——航空機の基礎理論のひとつを構成する氣體力學の法則は、わが國において成立すると同時に獨逸や米國においても齊しく成立するのである——などと見當違ひな『例證』を試みて、力みかへつてゐられるのである。

宮本氏は東洋科學は直觀的、綜合的、歸納的であるに對し。西洋科學は論理的、分析的、演繹的であるとする見解にこつびどく反對して居られる。氏によれば科學とは本來この双方を必要とするものなのであつて、こんな區別は『反動的』であり『非科學的』であつて『直觀的科學論』のときは一顧の價値なきものと思はれ』てゐるやうである。しかし氏のやうな考へ方はギリシヤ科學の限局性を認めながら、その否定的發展としての近代科學を考へようとしてゐる平田氏のそれに比して遙かに『非科學的』『反動的』であるといはざるを得ない。

宮本氏はいはれる——分析は科學のすべての分野における必然的手段であるが、分析だけからは理論も法則も決して生れない。分析の結果が綜合されて初めて理論となり法則となつて完成され

るのである——と。然りその通り。しかも西歐近代科學の致命的な缺陷は、まさにその體系的完成の最終段階に立つて動脈硬化的症狀に陥り、直觀的、綜合能力を喪失した點にあるのである。そこにはじめて西歐近代科學の東洋的否定昇華の必然性が生れてくるのである。

宮本氏つひに「歴史的事實」を持ち出してきて東洋科學のつまらなさを大聲で呼ばれる。——東洋科學が直觀を特徴とし、同時にそれが西洋科學に卓越する所以であるとすれば、その起源において敢へて後者に後れるところのない東洋科學が、何故に駁々として生命的な發展を遂げ得なかつたのであるか。そして最近の百数十年このかた輕蔑すべき論理的科學を西洋諸國より輸入するために、慘憺たる苦心を拂はざるを得なかつたのであるか——と。このやうなつまらない議論は餘りされない方が、宮本氏の名譽のためには好都合なのではないかと思はれるが、専ら實證性を重んじられる氏のために、さらに筆を進めてみやう。



1) 平田氏は次のやうな例を擧げてゐられる。

ギリシヤの幾何學は、それ自體が完了した圓滿純粹の形相を持つることを目的とした。コンパスは圓を描き、丁規はただ二點をつないで直線をあらはす他の使用は嚴禁されたたとへば、「任意の角の三等分は不可能である。」といふエウクレイデスの決定にたいして、圖のごとく、任意の角、 $\angle ABE$ の、一邊 BA 上に任意の一點 A をとり、 A を中心とし AB を半徑とする圓を畫き、 A より一邊 BE に平行に直線 AG を引き、しかるのち、丁規の一端を B 點に固定しつつ、それを、直線 BE の位置から、 AG の方向に向つて移動しつつ、コンパスを AB の距離にひらき、その一端を周圓におきつつ、丁規の移動とともに、丁規の上において AB の距離をたもち、つひにコンパスの兩端が圓周上の一點 C と直線 AG 上の一點 D に位置をしめらるることとする

ときは、その時作られる三角形 ACD において、 $\angle CD$ と $\angle AC$ は相等しきゆゑに、その底角 $\angle CAD$ と $\angle CDA$ は相等しく、したがつて、その外角 $\angle ACB$ は $\angle CDA$ の二倍である。しかるに $\angle ADC$ と $\angle CBF$ は平行線の錯角として相等しい。また $\angle ACB$ と $\angle ABC$ は相等しいゆゑに、 $\angle ABC$ は $\angle CBF$ の二倍である。ゆゑに $\angle ABC$ を二等分すれば、 $\angle ABF$ は三等分されるのであるが、エウクレイデスの幾何學においてはかゝる現實的可能性をも、コンパスや丁規の使用がその本來の規定を逸脱してゐることのゆゑに否定された——と。

科學を支へるもの

こゝまで来ると、宮本氏の歴史的認識と科學的世界觀の完全な缺乏の表明以外の何ものでもない。くどくどとこれを批判するのは煩はしい限りであるけれども、折角宮本氏が力瘤を入れてゐられることでもあり、事のついでにもあるから一言いつて置きたいと思ふ。

科學史的發展の性格を先づ眺めてみよう。西歐近代科學の母胎たるギリシヤ科學は、古代バビロニアとエジプトのアジア科學の武力的掠奪とそのギリシヤ的整形によつて成立した。しかもそのギリシヤ科學がその限局性によつて自己矛盾の中に沈淪し、舊秩序が全歐を席捲した時、この

ギリシヤの古典を救済しそれに息吹きを與へ、西歐近代科學勃興に至る期間の科學的貯水池となつたのは、かのアジア的サラセン帝國なのであつた。この時東方アジアにあつては八幡船を指標とする日本古代廣地域國家の隆盛期があり、東西相呼應して東洋科學の偉大なる伸長があつたのである。

いはゆる西歐近代科學なるものは、十字軍戰爭によるこのアラビヤ科學の劫掠に根ざすものであり、しかも東方への通路をサラセン的勢力に阻まれた西歐民族のアフリカ、アメリカに對する暴力的收奪行爲に基く資本の蓄積を背景として興隆したものである。一方東洋侵略の海上ルートが八幡船の活躍によつて阻止されるや、イギリスはオランダと同盟を結び、カトリック教國の世界侵略の慘狀を繰返し「建育」することによつて日本幕府を鎖國政策に導き、着々として暴力體制を構築した。この暴力體制の苛烈無殘な構築こそ、西歐近代科學勃興の槓杆であり、アジア的文化財と資源の掠奪こそ、その原動力であつたのである。東洋科學の沈滯はこゝにはじまる。問題は科學自體の狭い視野のみから理解し得るところではないのである。

然らば我々は何故「輕蔑すべき論理的科學を西洋諸國より輸入するために、慘慚たる苦心を拂はざるを得なくなつたのであるか。答へは既に明瞭である。我々は近世の西歐的暴力體制によつ

て沈滯しつゝあつた東洋科學を復興し、體系的破産に瀕せる西歐科學をこのなかに解體して、眞に發展の可能性をもつ科學體系を創造せんがために批判的攝取をなしたのだ。近世における東洋科學の後進性は少くとも事實であつた。しかし重要なことは「後進性」といふ單なる事實ではなくしてその原因なのである。

宮本氏はどうやら形式論理學的思想能力しか持つてゐられないやうなので、「否定」といふ言葉が持つてゐる發展的性格を理解できないかも知れない。しかし我々はもうこれ以上宮本氏に拘つてゐる必要はないであらう。平田氏が「近代の辨證法における實踐的否定の方法は、さらに（近代科學の）實證的客觀的な證明をも否定昇華してゆくものであるが、現代においては、その辨證法自體の創造的否定が問題となつてきた」とされ、現代の科學世界の否定的統一が日本によつてなされねばならぬとされる議論には傾聴すべきものがある。たゞし平田氏の日本科學の理解とその考へ方には、田邊哲學的な色彩がきよめて濃厚であり、そこに氏の科學論の限界と誤算が胚胎してゐることは指摘して置く必要があらう。

平田氏の日本科學に對する考へ方は、前掲山雅房科學史叢書「科學の始め」のうち「日本古代文化の立場」(五〇—五六頁)および「古典科學の性格」(二四七—二五三頁)を参照されたいが、いま、重要な點をとりあげてみると、次のやうである。

(イ)日本がその科學的研究の發展によつて、世界的な科學國家となる方向に向つたのはもちろん明治以後のことであつた。古代日本がなしたげた文化的偉業はこの方面にはなかつた。その世界文化史上特筆さるべき偉業は、じつに國體觀念の淨化、昇華、醇化といふことであつた——それはイスラエルのモーゼの十誡のごとき。またエホバ神にたいするごとき、抽象的觀念の昇華でなく、具體的現實的な事實にたいする觀念の醇化であつた。ゆるにヘケライズムの世界主義が、國土のない世界主義であるのにたいして、古代日本においてすでに確立した世界主義的基礎觀念は、國土を中心とした世界平和主義であつた——かゝる觀念の國家的確立が、その力を實際に發揮し、かゝる國家的世界觀を中心としてのみ、國土をすてゝ個人的に發達する科學でなく、國土とともに人類すべての幸福となるごとき眞の科學への進路が定まることを、日本が身をもつて實證すべき時は、明治以後まで待たねばならなかつた。五五—五六頁)この場合に氏が「古代日本がなしたげた文化的偉業はこの(科學の)方面にはなかつた」とさ

れる時、「科學」といふ概念の規定が重要な問題となつて來なければならぬ。氏は——

(ロ)科學の始めはどこまでも、内觀的立場からでなく、ギリシヤ的な外顯性から出發する。

古代ギリシヤ人こそその典型であつた。(二五二頁)

といはれ、ギリシヤ科學における有限性を指摘しつゝ、さきに引用したやうに「ギリシヤ的有限の否定的發展において」近代科學の性格を把握しようとするのであるが、同様にギリシヤ的論理の論證性を指摘しつゝ、「論證性そのものは、ギリシヤの論理學では一つの型とまでなつてゐるから、その型を了解しないかぎり、その型を眞に破ることはできない」といはれてゐる。その結果——

(ハ)この立場を了解するとき、はじめて古代科學史におけるエジプト、バビロニア、インドおよびアラビアの科學等の歴史的意義も明らかとなる。たとへばインドの記數法にしても、アラビアの代數學にしても、ギリシヤ的思惟の濾過をへないかぎり、近代の貢獻をなし得ない運命をもつてゐた。ギリシヤ科學はこの意味で眞の古典科學であつた。(二五一頁)

とされるのである。そこで氏が「古代日本がなしたげた文化的偉業はこの(科學)の方面にはなかつた」とされる理由が明瞭となつてくる。したがつて——

(ニ) 日本においては、純粹な科學の發展はなかつたけれども、どの文明もなしえなかつた國家統一の觀念を完成した。——しかしかゝる觀念も、その發展をギリシヤ的な科學の否定統一から再出發せしめない限りは、その強烈な昇華能力を使用する對象を失ふことになる。ゆゑに現代の日本にとつてはギリシヤ的な科學形相の否定から、現代の科學世界の否定的統一までの過程が、急速にかつ、國民全體的に行はれることを切要とするわけである。(二五二頁)

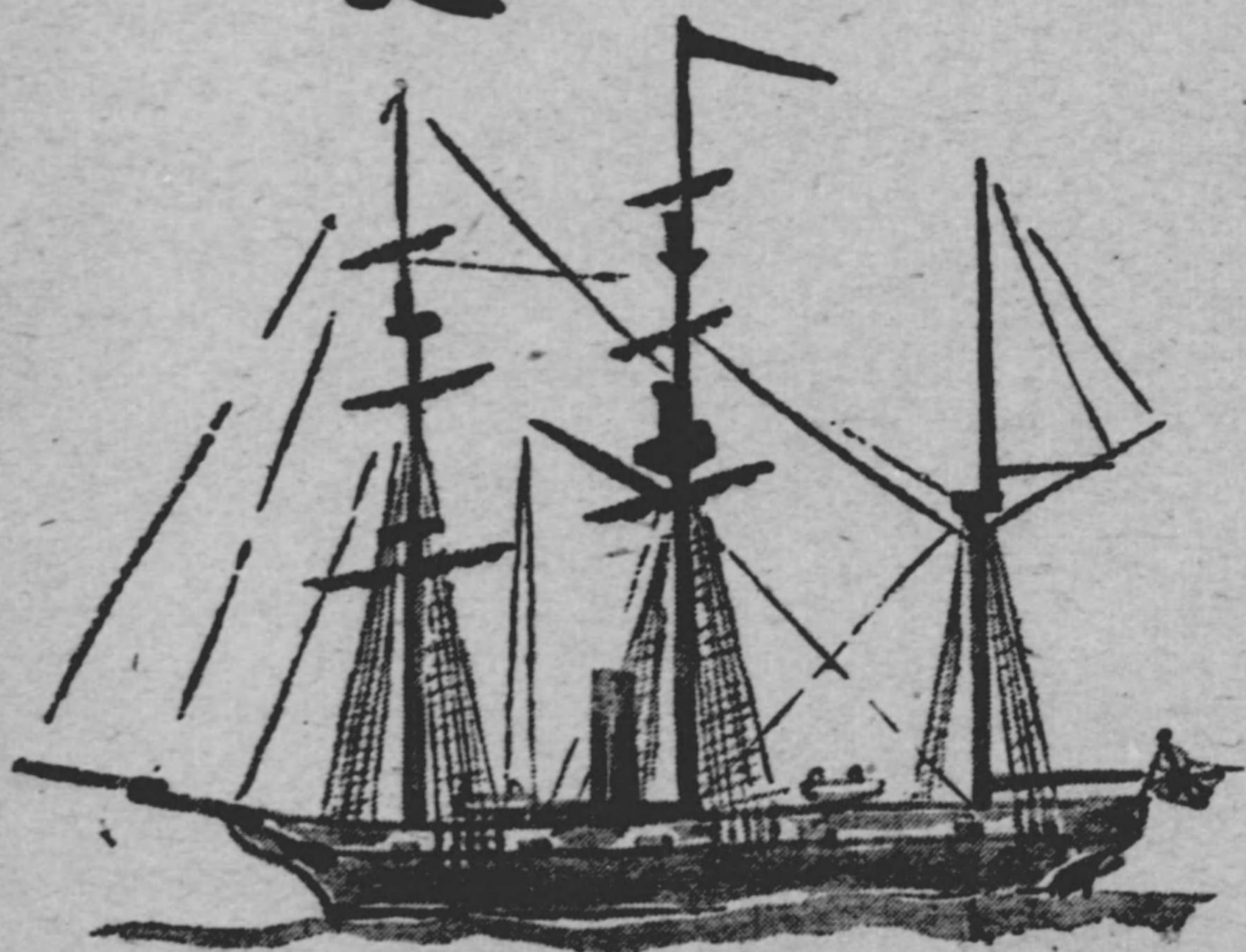
といはれる所以も了解し得るのである。しかし實は、この科學論の展開によつて、平田氏の貢獻はつひに畫餅に歸して了ふことを、私は惜しまざるを得ない。日本古代文化の世界史的な偉業は、國體觀念の淨化にありとされる平田氏の見解にはもとより異存はあり得ないが、印度および支那科學が誤つた方向によつて歪曲され、退化停滯の途を辿つたに對し、日本がこれら印度・支那的科學の「悪影響」から免れつゝ、「獨創的な變形によつて純粹に日本的なもの」になし得たと平田氏がいはれる時、問題は實にこゝにひそんでゐるといはねばならないのである。その場合に「その原因は、日本が、これら非科學的な二大文化の影響を、ことごとく國家統一の昇華力の面に用ひてしまつたからであつた」(二五一頁)とされるのは、誤りであつて、「日本はギリシヤと反對に最初から、民族國家としての一方向にのみすすみ、ギリシヤにおけるやうな都市國家として

の立場をもたなかつた。それゆゑに、日本においては、純粹な科學の發展はなかつた——(二五二頁)と氏自身がいはれる時、我々は國家の歴史的地理的な諸條件と科學體系との聯關を考へざるを得ない。然らば科學の西歐的タイプに對立すべき日本的タイプの存在を認め、その獨自な展開を我々が豫想し得ることは當然のことではなければならぬ。必要なことは「ギリシヤ的な科學の否定統一から再出發せしめる」ことではなくて、日本古代科學そのものから、現代の日本科學を再出發させることなのだ。最近日本科學振興の聲に應へて、江戸時代の日本科學者の再認識が叫ばれてゐるが、この場合にも重要なことは、江戸時代の科學の背景をなしてゐた。幕府的な小地域に限局された日本の認識なのである。その認識を缺くがために、日本科學の正當な評價が阻まれ、それこそは「非科學的」な日本科學讚美論か、その反對に日本科學否定論しか生れて來ないのである。學問の國境は、狹義の愛國主義からではなくて、却つて世界史の透徹した認識によつて生れてくる。「日本においては純粹な科學の發展はなかつた」かも知れない。だが「日本科學」の發展はまさにあつたし、またそれは「日本科學」以外のものではあり得なかつたのである。今日以後においてもそれはさうでなければならぬのだ。

——十六年五月稿——

偽られたる

近世史



I 經濟史への反省

メフィストフェレス この素晴らしい歴史を、俺が作ったのだ。

日本人

フン。

メフィストフェレス いまにお前にも作つてやるぞ。

日本人の強力なる一撃、メフィストフェレス奈落に墜つ！

日本人(獨白)

フン、俺のものは、俺が作るのだ！

新秩序と二つの經濟史

二つの歴史がこゝに流れてゐる。

この二つの歴史の本質的な區別のわからない人間は、永久に、そして何ひとつ眞實を知ること
も出來ず、語ることも出來ないであらう。たとへば、經濟史をとりあげてみよう。アンドレ・モ
ーロアは、その「英國史」のなかに、次のやうなフロアサールの文章を引用してゐる。

「イギリス人は、カアンの市中に三日間殿様であつた。そして羅紗や、寶石や、金銀製の食品
類や。その他のあらゆる財寶を掠奪し、それらの分捕品を一つ残らず平船に積んで、イギリス
艦隊まで送りつけた。……到底信じられないほど多量の羅紗を、イギリス人たちはサン・ロー
の市で發見した。……ルーヴィエはノルマンディーの一都市で、其處には多くの羅紗製造所が
設けられてゐた。この都市は、大きくて、富裕で商業が盛んではあつたが、全然城壁で圍まれ
てゐなかつたので、丸裸になるまで掠奪されてしまつた」

と。誰でも知つてゐるやうに、これは破廉恥なイギリス經濟史の、ほんの一駒にすぎない。次
のやうなマンデヴィルの言葉と共に、西歐史家が「私的犯罪の領域を去つて見るも、一體國民的

犯罪なくして世界市場が成立したか、然り國民すらも成立したか、そして罪の樹は、同時にアダムの時代以來智慧の樹でないか？」と自問してゐるのも侵略的ヨーロッパのみを對象として作りあげた彼らの學問的な限界を示すものにほかならないのである。

「吾々がこの世界で悪と名付けるものは、道徳的のそれであつても自然的のそれであつても、吾々をして社會的產物たらしめる大原則であり、例外なく總ての職業と仕事の固き基礎であり、生命であり且つ支柱である。吾々はすべての藝術、科學の眞實の起源をこゝに求むべきである。そして悪がなくなる瞬間に、社會は死滅すべく、また全々支離滅裂のものとなる」

と。このやうな原罪の觀念は、全くヨーロッパ的なものであり、日本のものではない。マンデヴィルとは、かゝるヨーロッパ的觀念を、世界史の一般的な法則にまで高めようとしてゐるのだが、もし世界史が、ヨーロッパおよびその延長たるアメリカの支配によつて完結するものであれば、我々は、この「法則」の支配をも認めなければならなかつたであらう。しかしこれは、所詮資本主義社會の論理であり、法則であるにすぎないのではないか。

滑稽なことに、從來のすべての經濟學者は、資本主義が、經濟の全體だと思ひ込んでゐる。ほかのあらゆる經濟體制は、資本主義にいたる道程にすぎず、「後れた」經濟體制なのだと思へて

ゐるのである。彼等の論法に従へば、日本における「資本主義」經濟が、非資本主義的な要素を多分に持つてゐるのは、ただ日本の資本主義が「後れてゐる」故であり、遅かれ早かれ資本主義化するべきものである。試みに内外を問はず戦争と經濟を論じてゐる書物を瞥見すれば、一つの例外もなしに、資本主義の構造を追ひかけまはして、そこから色々な結論を抽出するのみであることを氣付くであらう。

イギリス人やアメリカ人の經濟學者ならそれも良い。だが日本人の經濟學者なら、これは許すべからざる思想的犯罪であることに、なぜ人々は氣付かないのであらうか？ 資本主義經濟は政治的民主主義と分離して考へることは出来ないといふのは、全く初步的な常識である。従つて日本においては、社會主義がさうであつたのと同様に、資本主義もまた國體の敵である。國體の變革なしに資本主義經濟はあり得ないのである。幕末以後の諸段階において、日本の「資本主義革命」が「不徹底」に終つたのは、商業資本の蓄積が足りなかつた爲でも、日本が「後れてゐた」爲でもない。世界史の示すところによれば、このやうな場合、國際資本の滲透によつて、他動的な資本主義革命が進行し、民族資本は、この國際資本のなかに吸収解體せしめられてゐる。ひとり日本においては、國體の歴史的な傳統がこれを峻拒したのである。

もしそれ「日本資本主義」の概念を、無批判に導入すれば、どのやうな誤謬が発生するか？ 國家目的と資本の意志との間に發生しつゝある摩擦は、かゝる觀念の必然的な歸結にすぎない。ヨーロッパ・アメリカ的な歴史から、日本の歴史を確然と區別すること——そこから一切の觀念と現實の新しい秩序が出發する。經濟の革新は、日本においては國體と相俟つてはじめて可能であり、「國民的犯罪によつて成立せる世界市場」の偶像は、けがれなき歴史の法則を貫徹せしめることによつてのみ叩き潰すことができるのである。資本主義の論理を以て自己の論理とし、犯罪の歴史に對するに犯罪の歴史を以てして、新秩序の觀念を導き出すことはできない。もし「日本資本主義」が新秩序に轉形し得るならば、アメリカ資本主義もまた新秩序の擔ひ手となり得るであらう。新しい秩序は、正しい歴史の系統の上にもみ可能である。

經濟と經濟學の偶像について

餘りに多くの傳説が我々の周圍に氾濫し、餘りに多くの偶像が、我々を盲目にしてゐる。ナチスの理論的指導者アルフレート・ローゼンベルクは、次のごとくいふ。

「教授連はあらゆる大學に於いて吾々の従ふべき所謂經濟法則を説いた。而も彼等は「法則

的」活動が何れも一つの出發點なり前提なりを持つてゐるものであり、この前提から必然的な過程が生じてくるのであることを忘れてゐた。例へば國際金本位制は人爲的に吾々に植ゑつけられた黄金妄想を前提としてゐるものであつて、「自然法則的」と考へられてゐるけれども、この黄金妄想を除去すれば啓蒙が行はれてから宗教裁判的中世の魔女妄想が消滅したやうに消滅して了ふであらう」(「二十世紀の神話」中央公論社版)

と。「日米八十年の友好關係は……」といふ外交的合言葉のごときも、國際資本主義の偶像に由來する歴史的傳説の一つたるものであつた。干戈の間にもみえることだけが戰爭ではないといふのは、今日ではありふれた常識となつてゐるが、然らば經濟戰とは何ぞやといへば、經濟封鎖や資産凍結のことだと思ひ込んでゐるのも、今日の憐むべき「常識」の一つである。日本が「世界資本主義の一環」であつた限り、日本の經濟的利害は、國際資本の利害と一致してゐた。然るに日本が自給體制を作らうとした時に、國際資本との衝突が惹き起され、こゝに經濟戰が開始されるといふ寸法らしいが、幕末以後の全日本經濟史を貫いてゐるものは、國際資本との格闘の歴史であつたのである。

資本の不足に悩み、「外資」の輸入に熱心な努力を拂つたにも拘らず、他面においては、この

「外資」の反國家的性格をいかにして制禦するかといふ問題こそ、日本經濟の特異な性格を明瞭に示すものであつた。我々がもし「日本資本主義」といふ經濟史的な妄想をとり除くならば、事態は驚くほど違つたものにみえてくる。軍艦を含む一切の兵器の生産資本と技術とを逸早く獨立自給體系に成長させるために拂はれた徹底的な努力は、國際資本の敵性に對する確固たる認識の所産であつた。

愚昧な經濟學者は、十九世紀後半以後のドイツ經濟の國家的保護主義と、日本近代經濟とを類比する。だがあの赫々たるドイツ經濟の發展の底流深く潜り込んでゐたものは、ほかならぬ國際資本であつた。ドイツの重要産業は、カルテルとトラストを支配してゐた國際資本の手に掌握されてゐた。

「國際的な世界トラスト化は一九一九年以來の大經濟會議に於いて破廉恥な勝利を壽いでゐた。……勝利を占めるやフライマウエーの人道の假面を悉く脱ぎ去つた國際的金融海賊行爲のこの陋劣、それは驚くほど明瞭に民主主義的墮落を示したばかりでなく、更に古い國家主義の瓦解をも示してゐた。實に古い國家主義は劍を手に持つて金融に奴隸的奉仕をしたのである」とローゼンベルクをして嘆息せしめ、ヒトラーをして反ユダヤ體制の確立を決意せしめたこの

國際資本の敵性こそ、日本が一刻も休む時なく戦つたものなのであつた。我々は國際資本の經濟力に對し、國家の歴史と傳統を以て戦つた。あらゆる機會に叫ばれ、あらゆる時期を通じて不斷に繼續された國體明徴運動は、その經濟的意義においては、まさしく國際資本との戦ひであつたのである。かくのごときドイツ的保護體制と日本との間に、どこに本質的な類似點があり得たであらうか？ 經濟戦とはかくのごときものであり、今日の世界戦争は、この長い歴史的な闘争の結論を求めんがためのものにはかならないのである。

我々は、他を顧みるまでもなく、我々のもつとも近い歴史そのものなかに、我々の戦ひの目標と、そのもつとも的確な手段とを發見することが出来る。斷乎として國體の尊嚴を防衛し得た國家的觀念の昂揚以外に、我々のなすべきことはない。彼我の資本を計量し、軍事力を較計することからは、我々の歴史は生れて來なかつたのである。物質的な條件がどうあらうとも、守るべきものは守り、敵はこれを敵としなければならぬ。實にその觀念によつてのみ、經濟は國家に奉仕すべき強力なエネルギーの根源となり、矮軀能く國際資本の壓迫に抗し得たのではなかつたか。精銳なる武器は、寡を以て能く衆を破るに足るであらう。高き精神によつて統一せられたる經濟の尖鋭なる戦闘力は、以て經濟的諸量の機械的集團を破摧し、却つてこれを自己のエネルギー

に轉化せしめることを得るのである。我々は何よりもまづ資本主義的傳説と偶像の堆積のなかから、眞に價値あるものを發見しなければならぬ。

—十六年十一月稿—

I 窮乏と富強

グレシヤムとエリザベス

一五六〇年九月二十七日、エリザベス女王は次のやうな布告を發した。

「爾今一片貨は三ファージング（銅貨の名稱）、一ファージングは通常一片の四分の一、二片貨は一片半、六片貨は四片半の割合を以て通用せしめることとす。舊貨を持参したる者に對しては、一ポンドにつき三片の割増を附し新貨幣價值相當分の純銀通貨を與ふ。鑄貨を海外に輸出し、利益を貪らんとする者は嚴罰に處す。なほ舊貨は一五六一年四月九日限り法貨たることを得ず——と。

當時王室のアントワーブ通商代表であり、且つ財政顧問官であつたトーマス・グレシヤム——彼がこのエリザベス健全通貨政策の建言者であり、後に「グレシヤムの法則」と呼ばれた貨幣の流通法則の主唱者なのであつた。

この健全通貨政策は見事に奏效した。造幣局に持ち込まれた舊粗悪貨と引き換えられた新鑄貨の名目額は六十三萬八千百十三磅十五志六片であつたが、回收した舊貨を改鑄してみると七十三萬三千二百四十八磅の新鑄貨が得られたのである。これを要するにエリザベスは、七十萬磅に相

當する銀を六十萬磅で買ひ上げたことになる。引き換へ差額十萬磅、諸掛り差し引き四千磅がエリザベスの利得に歸した。この素晴らしい「取引」が、健全通貨政策のエリザベスに齎した第一の意味であつた。

エリザベスの利益。それはたしかだ。しかしもつと間違ひのないのは、トーマス・グレシヤムをその代辯者とするロンドン・シテイの金銀細工師——當時の金融資本家共の利益であつた。注意すべきことが三つある。

第一。エリザベスの健全通貨政策は、鑄貨の銀純分の増加ではなくて、却つて切り下げであつた。後に述べるやうに鑄貨の縁を削りつゝ私腹を肥やしてゐた貨幣削り屋と呼ばれる連中の旺盛な活動が、當時のイギリス通貨の信用を害してゐたことはたしかである。鑄貨はひとたび造幣局から運び出されるや忽ち縁を削られ、熔解され、造幣局へ持ち込まれる。鑄貨は純分以上の名目額を以て流通してゐたのであつた。エリザベスはグレシヤムの忠告によつてこの状態を是正しようと試みたのである。およそ經濟政策なるものゝ一般的な性格は、現實への追隨性にある。唯その現實の中から良き芽を育てあげるか、悪い芽に眼を奪はれるかだけが問題なのだ。ところでエリザベスが、純分の切り下げによつて、正しい量目を持つた鑄貨を流通させようとした結果は

どうなつたか。彼女が六十萬磅を以て引き換へた通貨は、この二五%の純分切り下げ以前においては、六十萬磅の三分の四倍、つまり八十萬磅の名目額を持つてゐたのである。然るに前述のやうに、その代りにエリザベスが新たに流通場裡に投げ込んだ通貨は、七十三萬磅餘にすぎない。果然一五六一二年二〇五を示してゐた物價指數（一五四一年を一〇〇とする）は、翌六二年には一九二・五に下落したのである。物價の下落、しかも他方には當然銀地金の價格騰貴が出現する。その結果はあきらかだ。生産者の損失と、銀地金の所有者たる金銀細工師の利益。この過程を通じて、全イギリスの富は金銀細工師の手に歸する。

第二。エリザベス朝のイギリス經濟界で注目すべき現象のひとつは、アメリカ（メキシコ）産金銀の夥しい流入である。その経路は二つある。その一は私掠船の活躍によるスペインおよびポルトガル貿易船襲撃、他のひとつはスペインとの特異な通商、即ちイギリス商品とスペインの金銀との交換であつた。イギリスに持ち込まれた金銀は、當然イギリス通貨膨張の直接的な原因となる。他方一五六一年の布告以後にもなほ續いて行はれた貨幣削り屋の活躍は、依然として通貨膨張の片棒を擔いでゐる。しかも金の取得を目的とするスペインとの通商は國內の生産物を總攬ひにしてスペインへ持ち出してふため、物資の國內需給は全く均衡を失するに至る。一五六二

年下落した物價は再び上昇に轉じ、しかもこの物價騰貴の利益はスペインとの通商に従事せるいはゆる冒險商人の手に歸した。彼等は獲得した金銀を國內に「投資」し、イギリスの生産物をスペインへ送り、受け取つた金銀を再び國內に「投資」する。彼等の投資物は豫定通り値上りを來し、そこから莫大な利益が轉がり込んで來たわけである。シテイの金銀細工師の活躍はいふまでもあるまい。困つたのは、いはゞ身ぐるみ脱いでスペインへの通商に貢献した大衆と、財政費の不足に追はれた哀れなエリザベスなのである。

第三。エリザベスの健全通貨政策を實行するためには、舊貨との引き換へのために相當額の準備銀を用意しなければならぬ。その銀をどこから持つて來るか？ トーマス・グレシヤムは親切にもエリザスのために二十萬クラウンの銀をアントワープの銀行から借り出して來た。アントワープ、後には阿姆斯特ダムに移つた國際金融資本とイギリス王朝との腐れ縁——後來イギリス王室を蠶食し、つひに主權を自己の傀儡とするに至つたその腐れ縁を最初に結んだものが誰であらうこのトーマス・グレシヤムなものであつた。

エリザベスはどうしたら良いか？

何よりも物價騰貴による王室財政の不足を補填しなければならぬ。その日暮しの借金政策と王

室財産の賣り立て、そして私掠船フリガットとの密約。それが彼女のなし得るすべてであつた。一五九四年、アイルランドの叛亂に際しては、必要な戦費を調達するため、十二萬磅の王室領が賣り拂はれた。著名なる海賊フランシス・ドレークは、印度洋を横切り、喜望峯を廻つて一五八〇年イギリスへ歸つたが、その積荷は、三十二萬六千五百八十磅に達し、その分捕品から、エリザベスは「かなりの分け前をせしめた」のである。イギリス海賊の跳梁に對し、スペイン王フィリップ二世が嚴重な抗議を發するや、エリザベスはドレークの乗船に至つていふ——スペイン人は汝を目して海賊となせり、と。ついで彼をして甲板に跪かしめ、悠々たる威嚴をもつて彼にナイト爵授與の接吻を與へ、語を結んで曰く「さあお起ち、サー・フランシスよ」と。

エリザベスはあきらかにもはや脱けることの出きない畏に王權を追ひ込んだのだ。ひとつには政治的な理由から——即ち貴族的勢力の牽制のために、彼女は新らしい政治的勢力たるジェントリー、ヨウメン、商人の三つの階級を利用した。そしてまた財政的な理由からもこの新らしい階級の利用に抜け目のない注意を拂つた。しかし「利用すること」はまた「利用される」ことでもある。エリザベスがそれを知らなかつた筈はない。だが彼女がそれを知つてゐようと、知つてゐまいと、それが何にならう。強大なスペインとの尖鋭な、そして宿命的な對立は、英國王たる彼

女にとつて絶對的な條件を意味してゐたのである。軍事費の膨張は、彼女をシテイに接近せしめシテイとの妥協は、あらゆる金融的策謀の默過となり、物價騰貴による財政の壓迫は、さらにイギリス王室の金權支配への途を擴大強化したのであつた。

「悪貨は良貨を驅逐する」——グレンシャムはこのアリストファネス以來の「法則」を強調しつつ、エリザベスと國民大衆を窮乏の一路へ追ひ込んで行つたのである。エリザベスの健全通貨政策は、このグレンシャムの法則に追ひ立てられつゝ、貨幣削り屋の陰謀を合法化することだけであつた。一六〇一年エリザベスは再び鑄貨純分の切り下げを行ひ、そのため銀の販賣價格は又もや騰貴し、その結果金銀細工師は、その所有銀地金をその後十年に亙つてセツセと造幣局に持ち込んで鑄貨と引き換へたのであつた。エリザベスはその家政婦的吝嗇と、莫大な王室財産の賣り立てによつて、他人の厄介になることを最少限度に止めることが出来た限りで、口さがない町人共の無遠慮な行動を、どうにかたしなめるだけの威嚴を保つことが出来たのである。

エリザベス朝にあつては、内政問題は國民的獨立の確保のため背後に押しやられ、内政史はいはゞ「光榮ある間隙」を持つた。アンドレ・モーロアにしたがへば——國民主義は愛國心の、愛

國心は元首への忠誠の形をとり、國民的情熱となつた——イギリスの海賊は十五世紀この方音にきこえてゐた。十六世紀には、それは愛國的行爲となるまでになつた——のである。だがこの内政史の「光榮ある間隙」と國民的情熱は、海賊的商業資本と結託したシテイの、王權および國民財産の合性的金融的篡奪のヴェールにすぎなかつたのである。

スチュアート家の人々

金を使はずにやつてゆくには、國王たるもの平和に暮らす他はない。平和主義者ジェームズ一世の最も確固たる信念も、またこれであつた。(モーロア)

だが事態はイギリス王權にとつて、決して好都合なものではなかつた。既に侮るべからざる勢力に達しつゝあつた新興階級の貪らんな發展慾は、國王の事勿れ主義と相反する利害の上に立つてゐた。スペインに對して屈服するのでもなければ、挑戦するのでもないどつちつかすの平和主義がいつまで続くものではない。反スペイン派はジェームズに迫つて幽閉中のサー・ウォルター・ローリーを解放せしめ、ギアナに派遣した。彼がスペイン人のため敗北するや、ジェームズ

はスペインへの申し譯に彼を處刑し、やうやく息をついたのであつた。

しかし一方ジェームズの軍縮の結果失業せる海軍將兵は腕に憶えの海賊稼業に轉じ、エリザベス以來のイギリス海賊の傳統を伸長せしめたが、このことはスペインとの不斷の紛争の種を蒔くに與つて力があることいふまでもない。オックスフォード大學出身のヘンリー・メインワーニグは、バーバリー海岸のアルモラを根據地として、一大海賊艦隊の首領となり、後貴族出身のワルシンガムと合體し、猛烈にスペイン船を襲撃、六週間に五十萬クラウンのスペイン貨強奪の輝ける記録を樹立、スペイン王はつひに自力を以てこれを討伐し得ず、ジェームズに強硬抗議、恐懼せるジェームズの嚴命によつて、やうやくメインワーニグは、その海賊行爲を中止する始末であつた。

一六一八年、ジェームズにとつて好ましからざる新らしい紛擾が歐洲大陸に發生した。スペインの支援を頼みとするハプスブルグ家は、ジェームズの女婿ファルツ伯フリードリヒを首長とするボヘミアのフス派との間に戦端を開いたのである。一六二一年のイギリス議會は一骨の體まで新教徒だつた下院の主戦論と、平和主義者ジェームズとの泥試合に終始した。自分の王子チャールズとスペイン王女を婚約せしめることによつて、事態を拾收しようといふのが、ジェームズ

の計畫であつた。スペインとの姻戚關係は、ハプスブルグ家に對するスペインの支援を中止せしめるに役立つであらうからである。

「不幸」にしてジェームズは、この計畫に失敗した。のみならず自分の計畫に反對する議會に對して、國家の最高事項は議會の權限外なる旨をジェームズが通告するや、議會は「議會の自由と、獨立不羈と、特權とは、イギリス臣民の論議の餘地なき古くからの相續財産である」旨を主張、國王と議會とは犬猿の間柄にあることを示すに至つたのである。

金を出さうとはいはない辭に、舊教支配との紛争を好み、「俺達の權利」だけは雄辯にしやべりまくることを心得てゐた連中との對立にも拘らず、しかしジェームズは兎にも角にも「金を費はない」といふ彼の信條がどうか保たれた限りで、王冠だけは人手に渡さないうで済んだ。だがスペイン市場の奪取によつて、強大な經濟的發展の地盤を掴まうといふイギリス新興階級の願望が、結局「新教國イギリス」の確立のための舊教國との抗争といふ宗教的熱情と結びついた時、危機はもはや避け難いものであつたといはねばならない。おつちよこちよいのバツキング公は大衆の煽動にのぼせ上つて、つひにとんでもない災厄の種を、スチュアート王朝の上にふりまいたのである。

スペインとの交渉のため、ジェームズの王子チャールズのお伴をしてスペインへ渡つたバツキングラムは、交渉に失敗してロンドンへ歸つてくると、「意外」にも反スペインの大衆の熱狂的な歓迎の的となつた。「彼等の喝采は、バツキングラムの浮薄で空っぽな心を反スペイン派の陣營に投じさせるに十分であつた。俄然、この唾棄されてゐた嬖人は、イギリス人の望んでゐた主戦派の人氣ある頭目となつた」のである。一六二四年二月、イギリス議會は彼の音頭取りによつて、バラチン選挙後フリードリヒ救援のための軍隊派遣を決議した。その結果は一萬二千の派遣兵の半數が輸送船の不潔と混雜のため病死し、指揮官マンズフェルド伯の無能のため、完全な失敗に終つたのであるが、彼は性懲りもなく、盲滅法な強硬外交を續けて行つたのであつた。

一六二五年父王ジェームズの死と共に、チャールズ一世王位に上る。チャールズの治世は血を以てはじまつた。一六二五年八月、軍艦九十隻、水兵五千人、陸兵一萬人より成るスペイン遠征軍は、バツキングラムの計畫通りプリマウス軍港を出發、一六二七年六月にはバツキングラム自ら將となつてフランスのユグノー戦争に「一役」を買ふべく大軍を以て歐洲大陸に向ふ。そのいづれも失敗に終るや、バツキングラムは一六二八年再びフランス遠征の途に上らんとして、ポーツマス港に至つたが、彼の暴舉に憤激せる一艦長ジョン・フェルトンによつて暗殺された。

バツキングラムはもつとも重要な二つのことに少しも注意を拂はうとはしなかつた。一つは舊教的勢力の追放を一番熱望してゐるものは議會であるが、同時にまたそのために要する一片の費用をも拂ひたがらないのも議會であること。二つは舊教徒たるフランス王ルイ十三世の妹ヘンリエッタ・マリアを妃とし、且つは王權の伸長を日夜念願してゐるチャールズ一世に對する議會の反感である。後來クロムウェルがさうであつたやうに、バツキングラムもまたイギリス新興勢力の一個の傀儡にすぎなかつた。バツキングラムは期せずして三つの役割を負はされてゐたのである。即ち(1)舊教的諸國との抗争、(2)王室財政の窮乏化、(3)王室攻撃の口實作製。これらのことは、すべてイギリス新興勢力にとつて缺くべからざる要件であつたのだ。おつちよこちよいで、貪慾で、無能なバツキングラムがチャールズ一世の宰相たることは、まことに好都合なことではなかつたらうか。

金もなく、戦争に追ひ込まれた國王はどうしたらよいか？「王は古證文をひつくり返してむかしの權利を見つけて來た法學者の助け舟で、廢絶に歸してゐた税を再興した……「有志」贈與、幾世紀このかた王有林の中に居を定めた者にその土地を王から買ひ戻させる義務、貴族の稱號の賣買、強制的ナイトの制、民兵維持税、辻馬車税、廷臣への特許權の拂下げといったやうな。

チャールズは、自己の臣民に、「專賣權を有する」組合が濫造したある石鹼の使用を強制させたがつた。この石鹼は、下着を焼いたり洗濯女の指を火傷させたりしたので、「舊教石鹼」と呼ばれた。ロンドンのかみさん連中は、この石鹼で火傷するのは神様のお告げで、これを使ふと魂までも火傷するものと考へた。」(モロー「英國史」下卷邦譯五五頁)だが「イギリス人がある租税を承認するには、それが有用だといふだけでは不十分であつた。これに加ふるにそれが議會の協賛を経たものであることを必要とした。これがイギリスの自由の憲章であつたし、また二三の市民たち——その最も有名なものはジョン・ハンブデンであつた——が擁護したところの綱領でもあつた。ハンブデンの州のシェリフは、彼に、その領地の一つに三十一シリング六ペンス、他の一つに二十シリングの船舶税を要求した(一六三七年)。彼は拒否した。それは税額の高ではなく(何故なら彼の財産は莫大なものだつたから)、原則の故にであつた。『二十シリングでハンブデンが破産したらうか?』だが、それが要求された事態の下にあつては、わづかにその半額を支拂つても、彼は奴隸となつたであらう。」(モロー、前掲書五七頁)

然り! それは「原則の故に」である。イギリス民衆の欲するものは、對外進出と共に王朝的專制の封殺であつたからだ。かくて一六二八年の權利請願書、一六四〇年の長期議會を経て、一

六四二年革命戰爭に突入、一六四九年チャールズ一世の死刑宣告となり、清教徒クロムウエルの「共和國」への途が建設されたのである。

クロムウエルの幻影

クロムウエルの共和國は、しかしひとつの過渡的な存在でしかあり得ないやうに最初から運命づけられてゐた。着々とその勢力を伸長しつゝあつたとはいへ、イギリス資本家階級は、いまだ全イギリスを自己の責任と負擔において背負つて立つまでには充分に成長してゐなかつた。何よりも先づ必要なことは專制君主制の否定であつたがそれがいかなる政權であれ、彼等が虎の子のやうに大切にしている資本の微發を考へるやうなものは忌避されねばならないのである。あひかはらず金を出さうといはない議會とクロムウエルとの間には、溝が深まり、「共和國」はクロムウエルの專制に變質して行つた。クロムウエルを支へるものは、彼の強力な軍隊のみであつたが、この軍隊の維持費を稼ぎ出すために、彼は四苦八苦しなければならなかつたのである。

「議會黨員は、チャールズが金を要求したのは事情止むを得ざる結果であるとは考へず、浪費と暴政の故に歸したのであるが、彼等の奸計は、彼等の唯一の重要な代表者たるクロムウエル

の頭に跳ね返つた。クロムウエルは、重税の要求を持ち出さうとすれば、人望を失はざるを得なかつた。彼は自分の執政に對する何ほどかの一般的信頼を得るまでは、軍隊を解散しようとはしなかつた。然るに軍隊を背景とする支配を續ければ續けるほど、彼の執政は人氣を失つてきた。解決しようのない矛盾に喘ぎながら、彼は日一日と惨めな日を送つたのである。」

(C. Hollis, "The Two Nations.")

クロムウエルが事態の好轉を圖つて敢行した對外政策は「見事」に成功した。一六五一年の航海條令、一六五四年のオランダとの戦争、あるひはまたスペインからのジャマイカの奪取、トスカナとローマ法王からの賠償金取得等々。しかしそれらのことはクロムウエル自身の財政に貢獻するよりは、却つてロンドン・シティの金融資本的勢力の勃興に貢獻することの方が多かつた。クロムウエルの極度の窮乏は、いはゞ稼げば稼ぐほど金貸共の財布を太らせるに終るやうな窮地に彼を追ひ込んでゐたのである。

一六五六年のポーツマス港——スペインから掠奪してきた十五萬磅の銀塊がこの港に陸揚げされた。金の必要に追ひつめられてゐたクロムウエルは、この銀塊を造幣局で鑄造する暇さへ待ち切れないほどだつた。幸ひにして現金でこの銀塊を引き取らうといふ特志家がクロムウエルの前

に現はれた。前ロンドン市長サー・トーマス・ヴァイナーと市參事會員エドワード・バックウエルの二人である。

ヴァイナーとバックウエルは、この銀塊買入れのためのシンチケットを結成した。即金として五萬磅、残額は毎週一萬磅宛分割拂ひ、賣買価格は造幣局の地金買上げ價格より、一オンスにつき二分の一片安、但し地金は後日すべて造幣局へ搬入の上、鑄貨とすべきこと——これが取引條件であつた。この取引の結果、彼等が取得した利益は四分の三と計算されてゐるが、造幣局で鑄造して貰つた新しい鑄貨が彼等の手に入るや否や、直ちに貨幣削り屋クワッパによつて水増しされ、また坩堝へ投げ込まれて高價に賣り拂はれたことはいふまでもない。二人の金銀細工師は、クロムウエルを利用して、莫大な儲け仕事をやつてのけたのである。

「クロムウエルが死んでから二年しか経たないのに、彼が作り上げたものはもう何一つそこにはなかつた。残つたものとしては、彼同様、たゞ残骸だけであつた。」(モローア、前掲書下巻一一〇頁)モローアのいふ通り「それは尙早であつたため、かくも短命に終つたのだ。」市民階級が國家財政を支へるに充分な經濟力をこの時までには作り得たとすれば、イギリス共和國はこのやうに呆氣ない結末をみないで済んだかも知れない。しかし當時のイギリス經濟の状態を以てしては、何

人が政權を握らうとも、彼は悪い結果の責任を負はされるだけであつたことは明白であつた。クロムウェルは二つの役割を負はされた。即ち專制王朝の打倒とユダヤ資本の輸入である。

一六五五年以來、彼はエドワード一世このかた追放されてゐたユダヤ人の復歸を默認した。彼はまた嚴格なる信仰を口にし、その實踐として革命を遂行したにも拘らず、ユダヤ人の自由に對してはこれを抑制しようとはしなかつたのである。かくしてクロムウェル時代を通じて阿姆斯特ダムのユダヤ資本は續々とイギリスに流入し、新興イギリスの政治力との抱き合ひによつて歐洲における法王權の獨裁を實力的に顛覆せんとしたのである。

クロムウェルがその「役割」を終へるや、王權と市民階級との妥協の段階が急速に準備された。彼等は自分達の思ひ通りに動く便利な道具を欲したのである。一六六〇年五月二十五日、新しい國王チャールズ二世は、イギリス國民の歡呼の聲に迎へられて、ドーヴァを渡つたのである。

シテイの勃興

エリザベス朝以來のイギリス海賊の活躍によるスペイン商船の襲撃、エリザベスの末期、ジェ

ームズ一世の初期に發足し、急速に發展したイギリス東印度會社の活躍、イギリス國內における土地圍ひ込み運動等によつて、イギリス資本は次第にその集積の度合を高めて行つた。この時期におけるイギリス資本の特徴は、商業資本の蓄積力を背景とする高利貸資本の急速な成長に求めることが出来るであらう。十八世紀後半以後の嵐の如きイギリス産業革命の昇進は、この時代における貨幣資本の集積によつて先行されてゐたのである。同時にまた西サラセン帝國の没落以後スペインを放逐されたユダヤ人によつて、オランダ金融資本が急激な發達の路を辿りつゝあつた。一方スペインがアメリカ(メキシコ)から持ち返つた多量の銀はアントワープに集結され、大陸におけるスペインの物資買付資金として活動しつゝあつたのである。

既にユダヤ人はローマ法王廳支配下の舊教的勢力への對峙を決意し、フランダースの金融資本を掌握しつゝ、オランダを経てイギリスにその反ローマ的政治力の確立を企圖したのであつたが、こゝにひとつの問題がある。

エリザベスの財政顧問にして、アントワープの王室の通商代表たるトーマス・グレシヤムをはじめ、他のイギリスあるひはオランダ商人などは、アントワープにおける經驗によつて、イタリア式の銀行制度については、充分習熟してゐた筈である。それにも拘らず彼等がフランダースか

ら歸つて、イギリスやオランダに直ちに同様の銀行を作らなかつたのは、奇異にさへ思はれるであらう。しかしこのやうな銀行の資金は預金——即ち他人からの借り入れ金によつて賄はれる。してみれば他人の金を掻き集めてそれに利子を拂ふといふ大きな負擔を敢てしながら、アントワープの大銀行家と競争しようとするには、餘程恵まれた條件がなければ不可能である。條件は徐々に、而して急速に成育した。

革命戦争と共和政府の時代を経て、地主や商人は餘分の現金を金銀細工師の管理に移しはじめた。それまではもつぱら執事や公證人が現金の管理に當つてゐたのである。公證人は持つてゐる資本も小さいし、シテイにおいても微々たる存在にすぎない。しかし彼等は單なる代理人であつて、依頼者の金を安全に管理する義務があつた。もし彼等が受託金を私消するやうなことがあれば、法律上の制裁を受けねばならなかつたのである。これに反して金銀細工師は自己資本も大きく、市長あるひは市參事會員の要職を占めてゐる者も多かつた。だが金銀細工師に對する場合、金は原則として貸付の形式をとり、もし彼等がその金を自分の目的のために使用し、損失によつて消盡してしまつたとしても、唯信用を失墜するだけの話で、何の制裁も受けなかつた。執事や公證人の手から金銀細工師の手に現金を移すには多少の決心を要する。ところが革命戦争が勃發

するや、特に議會側に立つてゐた地主の多くは、彼等の財産の安全を圖るために、それをどしどしロンドンへ送りはじめた。かうなつてみると、執事や公證人に管理させる場合と異り、金銀細工師がその預金に對して利子を支拂ふといふことは、「素晴らしい」事實として認識されるに至る。

當時、法定利子として公示されたのは六%であつたが、色々な名目をつけてそれ以上の利子を支拂ふことはむしろ公然の祕密となつてゐた。のみならず私的銀行家たる金銀細工師は、極く短期の預金にさへ六%以上の利子を拂ふのを常としてゐたのである。たとへば有名な「ピープス日記」の著者は、前ロンドン市長であり、且つ有数の銀行家たるサー・トーマス・ヴァイナーから、二日間の豫告期間付の通知預金について七%の利子を受けとつてゐる。民衆は高利付の短期預金でなければ金銀細工師共を信用しようとはしなかつた。金銀細工師で倒産したものは既に多數に上つて居り、また大金銀細工師は、國王に多額の貸付をやつてゐることも彼等は知つてゐたのである。一六六四年、ピープスは次のやうに書いてゐる。

「これらの大金銀細工師なるものは、いつ潰れるか甚だ疑はしいものがある。しかしたつた一時間の豫付で他人の金を預つて呉れる便益は實に大きい。」と。ヴァイナーと相比肩する大銀行

家、エドワード・バツクウエルから、ピープスはこの短期預金について六%の利子を受けとつてゐたのである。

だが危険は些細なきつかけから頻發した。一六六七年に起つた取り付け騒ぎは、チャールズが大藏省の現金引換へを停止しようとしたといふ。單なる噂がその原因の一部をなしてゐる。チャールズは慌て、かゝる計畫がなされたことはないといふ聲明書を發して、パニツクのみみ消しにかゝつたほどである。あるひはまたバツクウエルの場合をみよ。彼は最大の銀行家であり、巨富を擁することは良く知られてゐた。彼自身好んでその富祐きを誇示したのである。一六六五年、彼はチャールズの命によつて、密使としてフランダースに出かけた。ところがその途端にシテイには、彼に關する香しからぬ臆測が撒き散らされ、彼の銀行はフランダースへ出かけた留守中に、忽ち取り付けに遭つてしまつたのである。大藏省の時宜を得た援助のお蔭で、彼はやつと破産を免れたといふ始末であつた。ピープスはこの取り付け騒ぎの一例について、次のやうに書いてゐる。

「晝食後例のごとく登廳。そこへピアース氏がやつて來て、約五百磅ほどの金が、ヴァイナールの手から取り戻せない事情を告げる。その五百磅は、彼の言によれば、家族と子供達のために

彼が貯へてゐる金の殆ど全部の由。この有様では、全く銀行家はみんな潰れてしまふのではないかと思はれる」と。

だがこのやうな「危険」も金銀細工師達の發展を挫くには足りなかつた。國王は金に飢えてゐた。有利な貸付けによる「儲け仕事」は眼の前にぶらさがつてゐたのである。

「王政復古」となるや、バツクウエルはサー・ジョン・ショールと共同で、ダンケルクの軍用金貯方となつて、駐屯軍の資金送受の爲替業務を引き受けた。ダンケルクがフランスへ賣却されるや、バツクウエルは代金受取りの使者としてパリに赴き、その金をカレーまで護送して、王室の御用船に積み込んだ。ダンケルクの賣却代金は四百五十萬リール（當時の佛貨の單位）をパリでフランス貨によつて支拂ひ、二十五萬四千リールはロンドンに在るフランス資金によつて支拂れることになつた。正貨の輸送および手数料としてバツクウエルが取得した額は、十萬リールであつた。

註 モーロアの「英國史」によれば、——クラレンドンは、ダンケルクを五十萬ピストルでフランスに賣却し、口錢をせしめたといふ非難を浴びた——とある。シテイの有力者と王室側近の權力者との抱き合

ひの一場面を覗くことが出来るであらう。

話は續く。チャールズ二世はこの大金の入った機會に、ブロンディー 後述参照 に命じて鋸齒縁つきの新貨幣の鑄造をはじめべきだった。ところがチャールズもまたクロムウエルと同様に金に追はれてゐたのである。

ダンケルクの賣却代金は一六六二年の十二月、ロンドンに到着した。五千フランス・クラウン宛入れられてゐる箱が百個！ イギリス貨にすれば總額約三十七萬五千ポンドのものであつた。クロムウエルの場合にもさうだつたやうに、チャールズはこれを鑄造してゐる間待つてゐられないう有様であつた。百箱のフランス貨のうち、まづ一箱はブロンディーの手を経てフランスから買ふ新らしい貨幣鑄造機の買入代金の擔保に當てねばならない。この代金一千ポンド。次に二十箱はバツクウエルが海軍に貸付けた二萬ポンドの返済に振り向けられた。さらに二十箱は、王室の借財の返済に向けられた。

かうした調子で、フランスから送られて來た箱は、王室會計検査官の封印のまゝ、あらかたシテイの連中の手に渡つてしまつた。いまや頭角を現はしつゝあつたバツクウエル、ヴァイナリ、

メイネル、其他の市參事會員たる金銀細工師ゴールドスミスがその主なるメンバーである。これらの擔保にとられた金箱をとり戻すための新しい貨幣の鑄造に當てるべく、ロンドン塔の金庫に運び込まれた分は、かくてもはやいくらかも残つてゐないといふ始末になつた。ヴァイナリの首席番頭の言によれば、彼の主人一人で、ダンケルクから來た金のうち十萬ポンドを擔保にとり、貸金の返済を受けるまでの間に國王から受けとつた利息は一萬ポンドに上る。しかもブロンディーが鋸齒縁のついた銀貨を作つても、金銀細工師共は一向困らない。彼等は鋸齒縁付きの銀貨で貸金の支拂ひを受けるや否や、慌てず騒がず、忽ち坩堝へ投げ込んで溶かしてしまつたのである。貨幣價値の變動こそ、彼等の収益の源泉であつた。

一六六三年二月、バツクウエルはさらに大儲けの口にありついた。彼が改鑄して貰ふために造幣局へ持ち込んだ、共和政府時代の鑄貨に對して、國王は五%二分の一の評價益を與へたのである。

「銀行家達はその人數からいつて、五、六人を超えてはゐなかつた。彼等のうちの或ものは市參事會員であつたり、ロンドン市長であつたりした。……彼等はクロムウエルの時代に勃興した連中であつた。……彼等の大部分は金細工師ゴールドスミスであつた。」「Life of Edward,」 of Clarendon,

ed. 1827

しかし短期預金に依存してゐる金銀細工師が、國王の長期借入金を賄ひ得る能力は、當然一定の制約を受ける。金銀細工師は預金に對して最底六%の利子を支拂つた。國王はといへば八%乃至十%の利子を拂はねば金を借りることは不可能であつた。しかしもはやどんなに高利を支拂つても、それ以上金を借りることは不可能な状態が到來する。チャールズはつひにおよそ金を貸して呉れさうなものなら誰からでも五十ポンド、百ポンドといふ小金を借り歩かねばならない破目に落ち込んだ。それどころか金を貸して呉れる人間を周旋した者には、二%の周旋料をさへ拂つたのである。

ダンケルクの賣却金の受け取りによつて觸發されたところの、王室との有利な取引は、その後十年乃至二十年間に亘つてチャールズが金銀細工師から金を借りたといふ事實によつて一層進展した。金銀細工師はこの好機を逸せず商人や貴族からありつたけの金を掻き集めることに狂奔したが、もつとも有力な資金的背景をなしたものは、オランダ資本の進出であつた。

一六五二年のアムステルダム通信は、「現在オランダには、イングランドに比し、四十倍の金銀があると信じられる」旨を報じてゐる。「四十倍」といふ數字自體は信じ難いとしても、この

報道は少くともアムステルダムにおける資本の集積を示す點では、注目すべきものであらう。一六六五年ロンドン大火の復舊工事は、その大部分がオランダ資本に負ふものであつた。一六六九年、イギリス議會の委員會が受けとつた報告書はいふ——市參事會員バックニル氏は十萬磅以上メイネル氏は三萬磅以上、ヴァデブツト氏は一時六萬磅以上、デリーロースト氏は當時二十萬磅近くのオランダ資本を握り國內の利子率八%であつた時代にも、七%、六%乃至五%で商人に貸しつけてゐた——と。つまりロンドンのシテイは、オランダ資本の代理人によつて構成されてゐたといふことが出来る。當時イギリスの利子率はオランダに比し三%の高率であり、これがオランダ資本流入の重要な原因となつてゐたのであつた。

資本の調達は成つた。ポロイ儲け口は鼻の先に轉がつてゐる。かくして設立をみたものが、バツクウエルとヴァイナーを指導者とするロンドン最初の銀行組織である。アムステルダムの諸銀行が大陸諸國の政府財政の窮乏につけ込んで發展の機會を掴み、さきにはイタリアの諸銀行が、ヨーロッパの封建諸侯の十字軍戦争による困窮に乗じて興隆したごとく、イギリスの銀行もまた王室の赤字財政を足がかりとして生誕したのである。シテイは隆々として王權に迫つてゆくのであつた。

Ⅰ 詐取された勝利

「王政復古」の財政論

「王政復古」は、イギリス國家財政の旋回點となつた。從來の財政論にしたがへば、國王たるものは、平時一國の政府を維持するに足るだけの充分な資本を自ら所有し、非常特別の場合には租税の納付によつて彼を援助すべきことを國民に訴へたのである。ところが今度はさうではない。新らしい考へ方にしたがへば、國王はいふに足る資本を有せず、議會によつて協賛された所定の收入に全く依存し、議會はこれによつて、一切の國王の施政に對する監督權を確保するのである。もともと國王の資本といふものが、國家財政を賄ふに充分なほど大きいといふことは、殆ど望み難いものであることは、從來の歴史的な經驗が證明してゐた。然らば議會が國家財政の全責任を負ふといふことは、きはめて自然な結論であつたといはねばならない。だが一度かうした方式が採用されるや、議會は——特にその有力な構成分子たる市民階級は、この方式が自分達にとつて甚だ有利に「活用」し得べきものであることを直ちに發見したのである。

議會が若し國王に必要なだけの費用を協賛しないとすればどうなるか？ いふに足るほどの財産を持つてゐない國王は、その金を何らかの脆計によつて手に入れるか、僥倖をまつてゐるか、

然らずんば金貸から借り入れねばならぬことは明らかである。さうして債務の代償は、政權が國王の手から離れ、債權者の手に移ることを意味するのはいふまでもない。嘗てジェームズ一世は、その「平和主義」にも拘らず、その派手な宮廷生活の費用を支辨するために、議會に對していはゆる「大契約」^{グレート・コンダクト}を提議した。これに依れば、王は傳來の封建的權利のすべてを拋棄する代りに、二十萬ポンドの修身年金を得たいといふのである。當時の議會はこの提議を一蹴した。しかしいまやロンドンのシテイは、王權を抵當物件とする財政貸付の實行を自分達の利益であると考へるやうになつてゐた。一方議會は、完全に彼等の傀儡として操縦し得る自信をも持つたのである。

一六七二年オランダとの紛争が発生し、チャールズは百二十萬ポンドの協賛を受けてゐたにも拘らず、實際には八十萬ポンドしか受けとらなかつたのである。議員の構成分子たる地主は、王室の經費は廉いほど結構だと考へてゐる何も知らない無學な連中であつたし、「學問」のある連中、即ち市民階級の議員共は、收支相償はぬ財政こそは、彼等自身にとつて、間違ひもなく有利であることを見抜いてゐたのである。シテイと國王との抗争が激化するや、シテイは議會を操縦したのみならずチャールズの宰相シャフツベリー伯を味方に抱き込んだ。ジョン・ドライデンの

諷刺詩「メダル」にしたがへば、シャフツベリーとロンドン・シテイの目的は

王様を溶かしてしまふのではなくて

多分

王様の權力を

粹のなかにはめ込まうとしたのだらう

ドライデンはまた、ロンドン市長スリングスビー・ペザルを諷していふ――

シメイ（ペザルを指す）は幼い頃から

神を慕つて

國王を厭ふ風があつた

彼は

人を瞞したり
情にからませて
ユダヤ人仲間でも
もつともすばしく富を積んで――

その青年時代を過したのである。いまや長ずるにおよんでは――

時を空費するのは罪に値する

彼は暇さへあれば

國王といふものは無用の長物で

通商の足枷だといふことを説くために
せつせと書き物をするのが仕事だった

事實ベザルは「君主と國家の利益」について論説を書き、宮廷の打破と自由貿易を唱へたのである。しかしチャールズ二世治下のイギリスでは、國王は「通商の足枷」どころか、彼の治下で通商は未曾有の繁榮をきはめたのである。一六六一年に僅々二十六萬ポンドにすぎなかつた關稅收入は、一六八五年には八十萬ポンドに激増した。十六世紀の前半まで、イギリスの通商はスペインから現金を受けとつて、イギリスの商品を輸出するといふ商品―貨幣の通商の形をとつてゐた。エリザベスはその健全通貨政策の實施に當つて地金銀の輸出を制限し、貨幣資本の國內蓄積に貢献したのである。だがいまやオランダ金融資本を背景として、イギリスは反對の政策に移行した。チャールズは地金銀の輸出制限を解除し、他方あらゆる方法を以て東印度會社を援助した。印度はヨーロッパの貧弱な商品などには振り向きもしなかつた。たゞ裝飾用貴金屬として金銀を受けとることは喜んだのだ。印度の商品とイギリスの金銀の交換がはじまつた。デーヴナントによれば、十九世紀末には「東印度に運び去られ、そこに堆積した」金銀は一億五千萬ポンドに達したといはれる。もとよりイギリスの對外通商は、經濟的取引であるよりは、本質的にいつて政治的暴行であつたことはいふまでもあるまい。とまれあらゆる政治的援助の結果、チャールズの即位當時を一〇〇とする東印度會社の株式は、逝去の年には三〇〇に伸びたのである

る。しかしシティの連中にとつては「眞實」よりも彼等の利益の方が大切である。たとへば八百でも繰り返し喋りまくつてゐるうちには、それにひつかゝる連中も多勢出来ようといふ次第であつた。

これらの陰謀に對し、チャールズはいかに闘つたか？

チャールズ二世の挑戦

舊いイギリス鑄貨は、丸いスベ／＼した縁を持つてゐた。この縁を人に氣づかれない程度に削りれば、文字通りに「無から有を生ずる」奇蹟的大儲けが出るであらう。當時クリツパーと呼ばれてゐた連中が、この貨幣削りを商賣にしてゐた徒輩であるが、彼等の表看板は、金銀細工師であり、巢喰つてゐた場所はロンドンのシティであつた。削りとられた銀は賣りとばされたり、あるひは溶かして造幣局へ持ち込み鑄貨にされる。クリツパーと造幣局の役人との醜關係は隠れもない事實であり、エリザベスからチャールズ二世に至るすべてのイギリス君主の頭痛の種であつた。

フランス人ピエーエ・ルブロンド、彼はイギリス君主の救世主として現はれた。クリツパー

の活動を防止すべき法令は常にほとんど効果がなかつた。何らかの技術的な對策が發明されれば、これを防ぐことは不可能である。既に一五五三年、フランス人メストレルは周圍に模倣のある貨幣を鑄造する機械を造幣局に設置すべき許可をイギリス王室から得た。だが造幣局の役人自體が腐敗分子で充満し、王室の側近者もまたクリツパーの代辯者によつて占められてゐた時、この機械が實際に運轉を続けることは不可能である。メストレルの方法は効果がないといふ判定を受け、忽ち廢止の憂目をみたのであつた。

ブロンドは費用が低廉であり、且つ實用的な鋸齒縁のついた貨幣の鑄造機を發明、リシユリユの庇護を受けてルイ十三世の用ひるところとなり、一六三九年ルイ十三世は彼の機械の使用を開始した。一六四五年ルイ十三世は丸縁の鑄貨を全廢するに至り、ブロンドのフランスにおける名聲は赫々たるものとなつた。

一六四九年、ブロンドはロンドンに渡り、彼の發明の採用を議會の委員會に訴願した。然るに委員會はその採用を可決したにも拘らず、樞密院は七年間に亙つてその決定を延期した上に、ブロンドは造幣局員の豫期せざる敵意にさらされぬばならなかつた。ブロンドは憤然としてパンフレットを出版し、造幣局員が故意に貨幣の重量を不同ならしめ、造幣局の外部に在る一味

のクリツパーが重い貨幣を削り取り、造幣局員と利益を山分けにする醜狀を曝露した。クリツパー側はこれに對抗して、ブロンドーが自分の作った見本貨幣を壊したのにつけ込んで、貨幣磨造罪を以て拘引せんと試みるなどの悶着が持ち上る始末であつた。

一六五六年、有名なる彫刻師トーマス・サイモンは護民官プロテクタークロムウエルの肖像を持つ貨幣の鑄型を數個作りあげた。ブロンドーは造幣局に招致されて、その仕上げを依頼された。好機至る！だがクロムウエルは「恐らくは政治的な理由のために」(A. E. Feavearyear: The Pound Sterling) この貨幣の發行を取り止めた。ブロンドーは悄然としてフランスに去つたのである。

金權支配からの脱出を企圖しつゝあつたチャールズ二世は、ブロンドーの機械に著目し、彼をフランスから喚びかへし、「造幣技術官」に任用、年金を給與することゝした。造幣局内部の反對は依然として強かつたが、王權伸長に肝膽を砕いてゐたチャールズ二世の熱意がその反對を説き伏せたのである。

一六六三年二月、つひに最初の鋸齒縁通貨がイギリスに現はれた。ブロンドーの得意思ふべしである。

チャールズ二世はしかし、重要な補強工作を怠つた。彼は一定の期限を附して舊貨は法貨たり

得ないことを布告すべきであつた。然るに前に述べたやうにダンケルクの賣却代金もチャールズに充分の現金の用意を與へなかつた。舊貨の急速な回収は不可能である。チャールズの失敗がこゝに胚胎した。新しい鑄貨は削りとることが出来ない代り、クリツパー共はこれを熔解し、再び量の足りない、夥しい「磨造舊貨」を作り、造幣局へ持ち込んで新しい鑄貨との引き換へを要求したのである。このいたちこつこは明らかにチャールズに莫大な損失を與へ、シテイを益々肥らせることは疑ひもない。

チャールズは何をなすべきか？

チャールズの注意は、最初クリツパーが國內通貨の流通量を増加せしめるのを防止することに向けられてゐた。然るに當然インフレーション的影響を及ぼす筈の、クリツパーの暗躍は、案外に物價騰貴に影響する所が少なかつた。物價水準は、却つてきはめて平靜であつたのである。クロムウエル革命を経て、生産力上昇の途次にあつたイギリスにとつて、通貨はむしろ「適當に」増大せしめられてゐたといつて良い。してみれば問題はクリツパーの活動による通貨流通量の増大といふことではなくて、その増大する通貨を誰が支配するかといふことにかゝつてゐる。クリツパーの活動は、通貨發行權の王室からの離脱を意味する。王室造幣局は、人民共が掠めとつた

銀塊を貨幣に鑄造するためのいはゞ下請工場化しつゝあつたのである。

チャールズはこの點に著目した。クリツパー共が、自分の手で通貨流通量を増加させることをやめないとすれば——しかもその増加が國民經濟に不健全な影響を與へないとすれば、チャールズは自らその増加分を發行するに如くはない。だが金屬通貨に頼る限り、國王自らクリツパーの眞似をして、貨幣の量目を掠めるほかはないが、國王が胡麻化した鑄貨を、さらにクリツパーが胡麻化すとすれば、事能は到底穩當に濟む筈はない。チャールズがなし得る唯一の方法は、そもそも削り取りや熔解の對象となる金屬を放逐することである。彼が金屬以外の手段で通貨の供給を増加せしめることが出きるとすれば、目的は容易に達することが出きるであらう。しかも彼が國內にある金銀の量を積極的に減少せしめることが出きれば、事態はさらに有利となる。

紙幣——それがチャールズの計畫であつた。金銀地金の輸出制限解除と、東印度會社の積極的支援は、彼の紙幣の伸長に貢献せしめんがための手段なのであつた。かうした方法で彼は自分の發行した紙幣によつて充すべき空隙を、出きる限り大きくしたのである。

彼はしかし第一次歐洲大戰後に各國が採用したやうな政府不換紙幣の方法を直ちにとつたのではない。當時の人々は不換紙幣の使用を實現し得るやうな考へ方には馴れてゐなかつた。だがお

よそいかなる時代にも、取引の或部分は信用によつて行はれてゐたものである。一定の期日に現金で支拂ふといふ約定が成立することは、一般にさして珍らしいことではない。そのやうな信用取引の要點は、賣り手は最後には必ず本當の現金を受けるといふことである。チャールズは、この廣く行はれてゐた信用取引のなかに、彼の方法を發見したのである。

さきにも述べた通りチャールズは、イギリスの歴代國王と同様に「負債王」であつた。彼は債權者に借用證文として割符か彫板を渡してゐた。租稅收入その他によつて返済すべき現金が得られた時、彼はその割符や彫板と引き換へに、債權者に現金を支拂つたのである。チャールズはこの割符を鑄貨の代りに流通させようと考へた。そして後に至つて不便な木片の代りに、紙製の手形を發行し、これらの紙製手形は一定の期間を限つて、負債の辨濟その他の目的に對し、法貨として商店で受けとらるべきものとしたのである。チャールズのシステムにしたがへば、紙製手形の所有者はすべて將來の或時期にそれを現金で受けとることが出きる。これは手形の受取人にとつて「安全保障」となる。たとへば一六六七年の一月一日にチャールズに金を貸した債權者は、一六六八年の一月一日に誰でもそれを持参したものが現金と引き換へることの出きる紙製手形を渡された。しかし一六六八年の一日一日には、チャールズは一六六九年の一月一日まで流通すべ

き新らしい手形を發行するであらう。かくて未拂ひ手形の全部が償還される日は永久に來ないことになる。チャールズは手形の償還期日を徐々に延長すれば良い。また必要に應じてはこの期日を自由に伸縮することによつて、今日のオープン・マーケット・オペレーションのごとき通貨供量の調節を行ふことが出来るのである。

しかしチャールズの、この素晴らしい試みは失敗に歸した。

チャールズの流通手形はシテイの強敵となつた。手形の流通量が増加するにつれて、彼等が掻き集めてゐた金銀の重要性は次第に低下する。クリツパの活動は不可能となるし、貨幣價値の變動によつて吸つてゐた甘い汁はもはや望めなくなる。貨幣價値が下落するや、彼等は鑄貨を潰して、地金として賣り拂つた。貨幣價値が騰貴するや、彼等は地金を鑄貨に換へて安い商品や土地を買ひ漁つたのである。だがいまや何が出来るといふのだ。手形の價値が下落してもこれを鑄潰すことは出来ない。手形の價値が騰貴すれば、利益の大半は國王の手に歸する。彼等は急いで對策を講じねばならない。

シテイの金貸し共は、先づチャールズの手形をいつでも現金に引き換へることを宣傳した。引き換への希望者が殺到するとみるや、彼等はチャールズの長期手形の代りに、自分達の短期手形

——即ち持參人の請求次第、いつでも現金と引き換へるべき旨を記載した一覽拂ひの私製手形で、チャールズの手形を買ひとつたのである。一方彼等の發行した手形は、即時現金と換へることが出来るのだから、現金に引き換へようとしてバタ／＼するのは實際問題として無意味であることを、抜け目なく顧客に向つて説得したのであつた。

金貸し共の私製手形は、巧みに民心を掌握した。チャールズの長期手形はこれらの私製手形に對して大きな打ち歩を附され、信用を失墜して行つたのである。

一六七二年オランダ戦役が不祥事の導火線となつた。

シテイの代辯者たる議會は、チャールズの莫大な費用を支辨すべき租税の徴收を否決した。シテイは結束して、チャールズからこれ以上紙製手形によつて支拂ひを受けることを拒否するに至つた。シテイおよびその代辯者たる議會は、スペインの没落以後大陸における最大の強國となるに至つた舊教國フランスに對抗すべく、新教國たるスエーデンやオランダと同盟することを欲したのであるが、チャールズは妹のアン・オブ・イングランドの斡旋で、ルイ十四世と一つの秘密條約、俗に貴婦人條約と呼ばれるものを締結して、オランダと對立したのである。フランスおよびその政治に對するチャールズの傾倒ぶりは非常なものであつた。彼はフランスの絶對君主制に

自分の希望の模範的實例を發見し、君主とローマ教會との提携のみが、かゝる制度を可能ならしめることを知つたのである。

チャールズはシテイと議會の反對を押し切つてオランダ戰役を遂行するため、軍資金の捻出に頭を絞つた。一六七二年一月二日、大藏省は樞密院の承認を経て債務の支拂停止令を公布した。金銀細工師ゴールドスミスに對する王室の債務は向ふ一ケ年間支拂ひを延期される。且つクロムウエル時代からの慣行貸付利率となつてゐた八%は六%に切り下げられる。また王室債務の擔保物件として租税の一部が債權者に提供されてゐたが、爾後租稅收入はすべて通貨の需要に振り向けられるといふことになつたのである。但し日常必需品の購入契約者および供給者、あるひは被使用人の所有にかゝる王室手形は、例外として期限通り償還される筈であつた。

國庫は百三十萬ポンドの軍資金を手に入れた。だがこの王室の支拂停止令は、金銀細工師ゴールドスミスとそ
の預金者を震撼したことはいふまでもない。既に一六六七年オランダの艦隊がチームズを廻り、
メドウエーまでやつてきた時、彼等は苦い經驗を嘗めてゐた。預金者は金銀細工師ゴールドスミスの店へ押しか
けて、至るところに取付け騒ぎが演じられたのである。その時は王室の救濟出動によつて漸く最
悪の事態が回避された。即ち國王は金銀細工師ゴールドスミスに對する王室債務は期限を違へず返済されるべき

旨を公約して、人心の安定を圖つたのである。その頃まで、金銀細工師は顧客からの預金と同額の貸付けを國王に行つてゐると一般に信じられてゐたのであつた。しかし今度は事情を著しく異にしてゐた。金銀細工師ゴールドスミスは預金額の十倍にも當るほどの王室手形を、私製手形の濫發によつて買ひ占めてゐた。一銀行家サー・ダッドレー・ノースのいふところによれば、金銀細工師ゴールドスミスは一萬ポンドの支拂約定を負つてゐながら、地下室には一千ポンド以上の現金があつたことが殆どなかつたのである。取付——倒産——かうした場合にいつでも起るやうなことが起つたのだ。

この時まで、シテイは事態の真相を明瞭に認識してゐなかつた。チャールズの紙製手形の流通にしても、彼等自身が私製手形の濫發によつて、自分で實際に拂へもしない資金を勝手に作りあげて稼ぐことが出来ると思はれば、あながち心配したものでもない。彼等は國王といふものは自分達が思ふやうに利用できる接合劑接合劑のやうなものだと迂濶にも安心してゐたのである。しかしいまや一六七二年の恐慌のための責任者が必要であつた。國王か、然らずんば金銀細工師ゴールドスミスか？ しかも權力を背景とする王室手形と抗爭する場合、物質だけが頼りの私製手形といふものが、いかに無力であるかを彼等は身にしみて感じなければならなかつたのである。シテイは恐慌の責任を國王に轉嫁しなければならぬ。同時に通貨の發行者として、國王がいかに不適當なものであるか

を「證明」しつつ、通貨の發行權をそつくり自分達の手に握らうと計畫したのである。二十年の後發券銀行たるイングランド銀行を成立せしめるに至る機運は、この時シテイに根を下して成育しはじめたのであつた。

王權の没落

一六七五年、フランスの駐英大使ルヴィニは、フランスとの相互援助條約の代償として年額十萬ポンドの年金を、ルイ十四世からチャールズ二世に供與すべきことを申し出た。チャールズはもはや御用金を申しつけるために下院を必要としなくなつた。然るに一方一六七二年の恐慌に際し、國王の忠實な進言者として支拂停止令を提案したアシユリーは、いまやシヤフツベリ伯としてシテイの支持を受けつつ王權の攪亂に夢中になつてゐた。ジョン・ドライデンはその諷刺詩「アブサロムとアキトフェル」(前者はシヤフツベリ伯、後者はチャールズ二世の庶子たるモンマス侯を指す)の中でいふ。シヤフツベリは、種々様々の人間を糾合して背後にしたがへてゐたが、それらの人間は――

めいめい色々の目的で

同じ計畫に加はらうとしてゐたのだ

彼等の中には――

自分達の義務をより高く賣りつけて

王位を取引するユダヤ的な市場を作り

公衆の利益をわがものとし

慾得づくで

國家を紛糾させようとしたものもゐた

またほかのものは

國王などいふものは

金のかゝる癖にさして功德にもならない

無益な重荷だと考へてゐた

この連中は
農作物をとり入れるやうな工合に
正直なダビド（チャールズ二世を指す）をとり入れようしてゐたのだ。

だがルイ十四世から金と軍隊を手に入れることに成功したチャールズは、七面倒な手形騒動を
続ける代りに、小煩い下院を解散し、モンマス公をかつぎあげて一騒動持ち上げようとしたシャ
フツベリをオランダへ追ひ拂ひ、エセツクス、ラツセル、シドニーなど、いふ連中は獄死した
り、斷頭臺にひきすえられる始末になつた。

チャールズの後を襲つた王弟ジェームズが、兄のごとくぬらりくらりとした人物であつたとす
れば、シテイの陰謀は成功が伸びたかも知れない。チャールズはこつそりと一萬の常備軍養成に
着手してゐた。ジェームズ二世はその定員を倍加した。しかしジェームズは大きな誤算をやつ
た。彼は調子にのつて英國教會の彈壓を計畫し、自分が信教の自由を許してやつた非國教徒の支
持を期待したのである。「忽ちにして人々は、この新王の治下では強壓が残酷を極めさうなのを
見て取つた。——ロンドンの近くに王の手で軍隊の營舎が建てられた。かうして置けばどんな暴

動が起つても安全だと、ジェームズは信じた。そして何の氣兼ねなしに法律を蹂躪した。……若
年のサマセット公は、法王の使節を王の許へ招するやう命ぜられた時、かう言つたものだ、『臣
が法に背くことなしに陛下の命に聽従すること能はざるべきは、萬人の確證するところござい
ます』と。——『お前はわしが法律の上に居ることを知らないのか』と、ジェームズは怒聲を張
りあげて言つた。『陛下はあるひは然らん、臣はさにあらず』と公爵は答へた。反抗の精神は下
院の議員たちの間よりも、むしろ上院の間に現はれた。由緒ある舊教徒の家柄までが、王から供
與された高い職務を受けるのをいやがつた。この國の性質を知つてゐたし、それに、來るべき危
険な反撃を豫見してゐたので。法王インノセント十一世は、節度を守るやうに忠告した。だが熱
狂のあまり盲目となつた王は、一路破滅の淵へとその大膽な歩みを進めた。（モローア、前掲書
下卷一三七—八頁）

一六八八年、破滅の日は來た。かぬてイギリスの諸黨派と連絡をとつてゐたオレンジ公ウイリ
アムは十一月五日、颯爽とターベイに上陸し、ロンドンに向つて進撃したのである。

ウイリアムはルイ十四世との戦争を手土産としてイングランドに渡つてきた。彼は彼の母國の
戦争をイギリスに傳染させたのである。フランスとオランダとの戦争は、イギリスの國民にとつ

て、殆ど關係のないことであつた。しかし王權の蠶食を計畫しつゝあつた金融資本にとつて、これは又とない好機であつたことは間違ひがない。トンチ講年金だの富籤だのとあらゆる方法が試みられて、戦費捻出の方法も出つくした後、イングランド銀行の設立者たるパタソンは、大藏會議局議員たるモンターギユの手を通じて、次のやうな法律案を議會に提出せしめたのである。法律案の名稱は――

船舶に對する輸入葡萄酒噸税及びビール、エール酒（強味ビール）その他の酒類に課すべき地方税並に物品税の徴收を王室に許容し、且つフランスとの戦争を遂行せんがために百萬ポンドの前貸に應じたる者に對しては、上述の條例に基き、一定の報酬と利益を保證すべき法律案と呼ばれるものであつた。

一六九三年右の法律案が通過するや、ウイリアム・パタソンは、シテイの有力者たるミカエル・ゴツドフライの援助の下に、國王に對する貸付を目的とする共同出資會社イングランド銀行の設立にのり出した。イングランド銀行（正確な名稱は Governor and Company of the Bank of England）は株式の募集に着手して以來十日で全株式申込済となり、一六九四年營業を開始した。資本金は百二十萬ポンド全額拂ひ込みであり、當初の計畫ではその全額を國王に貸付け、八

%の利息と、毎年四千ポンドの營業補助金を受けとることになつてゐた。この銀行の特異な點は、國王に對する貸付額を限度として、政府の保證の下に「共同責任」で銀行券を發行する權利を與へられたことであつた。即ちイングランド銀行は一ポンドの銀行券を發行する。その一ポンドの銀行券の所有者は、銀行に對してその銀行券と引き換へに現金の支拂ひを要求することが出来る。銀行は現金引き換への要求を受けた時には、政府に對して一ポンドの租税を徴收してその一ポンドに相當する債務を銀行に辨濟することを要求することが出来る。このやうにして銀行は、その銀行券の所有者の現金償還の要求を充すことが出来るといふ次第である。これはどういふことになるか？ 銀行はその正味資産は政府に貸付けてチャンと利子をとつてゐる。しかもその貸付と同額の金を同時に他人に貸して利子をとることが出来る。イングランド銀行の創設者たるパタソン自身が説明してゐるやうに「銀行は自分が無から生ぜしめた金から利息を得るといふ恩恵に與つた」のである。

イングランド銀行が獲得した特權たるや、しかしこれ位の生易しいものではなかつた。銀行は百二十萬ポンドの政府貸付金のうち七十二萬ポンドだけを現金で渡し、四十八萬ポンドは「共同責任」の銀行券で渡した。その結果は、銀行は七十二萬ポンドの銀行券と、四十八萬ポンドの現

金を待つたのであるが、このことのために政府自ら銀行券を使用せざるを得ないことになり、人民共が実際にはビター一文も懐を痛めてゐない金に利子を支拂ふといふ事態が現出した。ウィリアムは先年の窮迫に當つて手形の發行を餘儀なくされたのであつたが、イングランド銀行はその餘剩銀行券と現金を動員して、相當の打ち歩をつけてこの手形の買ひ占めを行つた。いまやチャールズ二世と闘つて痛手を蒙つたシティは、きはめて合法的に王權の一杯の中にはめ込んでしまつたのである。

いくばくもなくして百二十萬ポンドの銀行券は制限額一杯まで發行された。しかし銀行の當事者達はウィリアムの財政が全く彼等の銀行券に依存してゐることを熟知してゐた。彼等の破滅はウィリアムの破滅である。彼等は平然として制限額以上の銀行券の發行を開始した。ウィリアムが銀行のこの非合法行爲を有効に制止しようとするれば、先づ債務を返済しなければならぬ。だがシティは、ウィリアムがそのために必要な特別税の協賛を得ることを妨げるに充分な勢力を議會のなかに扶植してゐることに確信を抱いてゐた。彼等は「共同責任」の紙幣の代りに、會計主任の署名で新しい紙幣を發行した。前者は“Sealed Bank bills”と呼ばれ、後者の“Cash notes”又は“Cashier's notes”と區別した名前と呼ばれた。後者はまた會計主任の名をとつ

た“Speed's notes”と俗稱されたものである。

一六九五年、政府は愚かな失策をやつた。同年十二月十九日次のやうな布告が發せられた。即ち

一六九六年一月一日以降クリップされた（周縁を削りとられた）クラウン貨および半クラウン貨は、納税および國王に對する貸付金の場合を除き流通せしめることを得ず。シリング貨は二月十三日、六ペンス貨は三月二日以降右に準ず。二月二十二日以降は納税の場合と雖もクラウン貨および半クラウン貨の使用を禁ず。シリング貨は三月二日以降、六ペンス貨は四月二日以降右に準ず。従つて四月二日以降はいかなる目的たるを問はず一切のクリップされた貨幣の流通は禁止さるべし。

これは例のチャールズ二世が試みたブロードの鋳造鑄貨の全面的な採用を意味する。ところが時期と方法を誤つた。當時多量の銀貨が改鑄のために造幣局に滞留せしめられて居り、流通量は「適度」な状態にあつた。のみならず右の布告後一、二ヶ月の間に納税すべき義務を負つてゐたものは、決して國民の全部ではなかつた。非納税者は忽ち通貨の受取拒絶をはじめた。至るところの店頭で紛争が起り、一般國民の間に喧嘩騒ぎが頻發した。物價は通貨不足のため下落

し、測り知れぬ惨害を及ぼしたのである。

政府がこの愚行を演じた時、應急の助け舟はイングランド銀行だけであつた。イングランド銀行の總裁ジョン・ホブロン卿は、民衆に向つて次のごとく説得につとめた。

イングランド銀行は、依然要求のあり次第銀行券を正金と引き換へる用意がある。しかしながらさうした要求は、正金が甚しく制限されてゐる今日においては、銀行券の急激な收縮を餘儀なくせしめるものであり、かゝる引き換へは決して諸君の利益とはならないであらう——と。

民衆はそれに同意した。混乱を救つて呉れるものなら何でも有難がるはかばかかつた政府もこれに同意した。かくしてイングランド銀行は、間もなくその銀行券の一部を不換紙幣として發行することを公認され、その不換紙幣で盛んに政府の手形を買ひ占めたのである。一六九六年十一月、イングランド銀行の營業報告書が議會に提出された時、銀行から百二十萬ポンド、オランダから三十萬ポンドの正金を借り入れたにすぎない筈の國王は、この幼稚な銀行券の奇術によつて、三百萬四千五百七十六ポンド十六シリング五片の債務を銀行に負つてゐることが發見されたのである。

イングランド銀行の紙幣インフレーション政策が意味するところは次のやうなものであつた。

一般的にいへば銀行は低物價を有利とし、デフレーション的傾向を支持する筈である。だがイングランド銀行の紙幣増發の本質的な役割は、銀行の通貨をして國家經濟の主要部分たらしめるために、國王の通貨に對する銀行の通貨の流通量の割合を増加せしめることにあつた。國王が銀行の特權を否定し、自ら紙幣發行の任にあたり得ることは、理論的にいつてその通りであるが、ウイリアムがそもそも王位に即いてゐるところの契約、即ち一六八九年の權利條例は、彼が議會の同意なしにこれを實行することを禁止してゐたのである——それはつまり實際にはイングランド銀行の株主たるシテイの同意を要することを意味してゐた。事態は既に明瞭である。チャールズ二世によつて試みられたシテイへの反撃は、イギリスにおいては二度と再び成功することは全く不可能となつた。

イギリスはシテイの手に歸したのである。

政府紙幣なるものは、その政治的性格の故に「不適當」であり、「純粹に經濟的な」中央銀行券こそがもつとも「合理的」な通貨であるといふ經濟學的俗説を打ち破るために、筆者は長々とイギリスにおける王權と金權の争ひを敘述した。イングランド銀行が出きた時、トーリー黨員達はいつた。「銀行と王權は兩立するものではない。」そして「これこそオランダ流の財政だ！」

と。モローによれば、彼等がこれらの新らしい措置を毛嫌ひした理由は三つあつた。「第一は政治的なもので、といふのは、それらの新措置が、ウィツグ黨の政權維持を助けたからであり、第二は経済的なもので、といふのは、借入れが便利になつたために、國家の経費が増大したからであり、第三は精神的なもので、といふのは、國の脊椎ともいふべき田舎のジエントルマンたちの犠牲において、財界人たちの勢力が急に増大したからであつた。」

かくて中央銀行制度こそは、もつとも「政治的」なものではなかつたであらうか！ ジョン・フライデンに諷されたロンドン市長スリングスビー・ペザルが今日ゐないと考へられるであらうか。ペザルがせつせと國王無用論を書いたやうに、今日の經濟學者共は、物質の高貴なる所以をせつせと書きなぐつてゐる。「確實なる準備」を持たぬ銀行券に不信を表明する學者共、總じて通貨の物質的裏付けにしがみついてゐる學者共は、グレンヤムからヴァイナリを経てパクソンに至るロンドン・シティの縁者共であり、アムステルダムからロンドンを経ていまやニューヨークに集結せる金融資本の代辯者である。我々は我々の日本銀行をして「學問上」イングランド銀行と同列に取り扱ひ得るであらうか？ 我々の國民的感情はもはやそれを許さない。然らば表見的な制度においてイングランド銀行のそれに似しよとも、日本銀行こそはまさしく國家

の銀行であり、日銀券は國家の紙幣でなければならぬ。

あらゆる國々が金融資本の支配下に歸した時、ひとり物質の利害を離れ、所有者の利害を離れ、物質への拜跪をやめて、正しく全體の利益に奉仕し得べき新らしい貨幣制度建設の可能性は、日本にのみ残されたものである。通貨はあらゆる意味で「政治的」であらねばならぬ。金權政治を克服すべき皇道政治の理念が、我國通貨制度の中に凝固すべき理由がこゝに生れるのである。蓋しイギリス王權の範例であつたフランス王制すら、金權支配の波に吞まれ去つた所以のもの、あらゆる君主制との對比において、萬古搖ぎなき皇道政治のみが、經濟と政治と一切の文化現象の根源的原動力たり得る所以を示してゐるのであり、問題の日本的還元のみが、今日の新秩序への唯一かつの途であることを物語つてゐる。「經濟一般」の學は成立せず、日本經濟の本源の再認識と擴充のみが残された課題となるであらう。

以上の二篇は、イギリス金融史へのノートとして、昭和十六年春に書かれた未定稿の一部である。十七年春の議會において、日本銀行はイングランド銀行の類型を名實共に脱して、完全なる國家機關として出發することになつた。蓋し當然の成りゆきといふべきであらう。

Ⅱ 思想戦線の結成について

ケネーとそのグループ

重農學派 Physiocrates の巨星フランソワ・ケネー Francois Quesnay (1694—1774) の名は餘りに有名である。彼のもつとも良き片腕であり、重農學派の指導者であつたド・グルネー Jean C.M. V. Gournay (1712—59) は餘り知られてゐない、しかし「中二階の集會」Réunion de l'entresol として知られた重農學派のグループ結成にあつて、ド・グルネーの寄與した功績は忘れることが出来ない。熱烈な經濟研究家たるこの年下の相棒は、ケネーの理論的、政治的活動の蔭の組織者といへる。ケネーがド・グルネーと相識るに至つたのは、一七五〇年頃だが、一七五二年、ケネーがルイ十五世の顧問醫となつた時、ケネーの名聲と信望とは、既に醫者としての域を脱してゐた。ルイ十五世は、彼を「朕の思想家」と呼んだのである。ド・グルネーの役割は、ケネー學說のもつとも良き、且つもつとも強力な支持者として、この理論に實踐的形態を與へることであつた。

ヴェルサイユ宮殿の一隅に與へられた、中二階にあるケネーのアパルトマンは、フランス第一流の思想家の集會所であつた。ケネーとド・グルネーを中心として、「經濟人」Economistes の